移住して安かピンガに慰安され

沼　田　信　一

信ちゃんの昔話（第二部）

ピンガと移民

沼田信一著

表紙説明　川柳

移住して安かピンガに慰安され

沼田信一

序　牛窪襄

「信ちやんの昔話」はもう8部まで書き上がっている。「まだ二巻位は書けるな」と、沼田さんは張り切っている。

従って、次次と発刊される筈である。

私は漫画挿絵を引き受けたので読んでみたが、実に面白い。つい魅かれて全部読破した。淡々とした素直な文が実感を強めて魅きつけるのだ。そのお笑いの中に、土地に命を賭けた開拓の厳しさが、ひしひしと伝わってくる哀感と訓えがある。

父の柔軟な社会性と周到な緻密さ、母の大らかな心を受

けた先天的緻密さと計画・決断と組織力・プラス努力と運により成功した人の貴重な体験と考え方には、訓えられるものが多いからである。

笑いながらブラジル移民の赤裸々な姿が解る「移民裏話」として一読御薦めする次第です。

(沼田氏はパラナ日伯文化連合会相談役、ブラジル・モラロジー研究協会副理事長、ロンドリーナ・ゴルフ場創設者、パラナ州・ロンドリーナ市在住)

ー面白いー珍しい。続・続を待っている。

ブラジル・モラロジー研究協会　理事長。
モジ・ダス・クルーゼス　イピランガ病院長

森　昇

先日沼田氏の昔話第一部を読ませて頂いて大変面白く、今回の訪日みやげに持参したところ大勢の人に大変に喜ばれた。

ところが帰ると早、第二部の印刷にかかっているという事で、その精力に驚いている。公私共に忙がしい人に良く書けるものだと思う。

第一部を頂いた時、もう一話、もう一話と引きつけられて読んでいるとたちまちの内に一冊読み終ってしまった。

読む方は面白ければ一冊一晩にでも読めるが、書く事は、

そう簡単に書けるものではないものをと、その努力に考えさせられている。

第二部では、なかなか面白そうに「ピンガと移民」「娘三コント」「砂の目方」「まぶしい屋根」「ピンガ虫」等々面白そうな話題が一杯。

更に、第三部では、目次を見ると「ムダンサと移民」「私の最後」「センベイ焼き」「雨を降らす木」「自然のセルベージヤ」等々、面自そうな話題で盛られているが、沼田氏は印刷は二冊で終りにしたいとの意向を洩らして居られる。然し私は続、続きを待っています。

沼田信一氏は、私たちの会の副理事長であり、ロンドリーナ市の名誉市民権を受けており、又、ロンドリーナゴルフ　クラブの創立者でもあります。

信ちゃんの　昔　話

第二部「ピンガと移民」の発刊を祝して

パラナ日伯文化連合会名誉会長

福　島　正　登

先日第一部を頂いて読ませて頂いたばかりのところ、今又、第二部の印刷にかかると言われる。目次を見ると面白そうな話で一杯。大体私は本をもらっても読み切らない事があって申し分けないのであるが、沼田君の昔話もその類

であろうと思っていたら、各章短編で面白く、氏の物の考え方と、此方にも考えさせるものあり、もう一編、もう一編と読んでいる内に頂いた日に読み終ってしまった。

一移民としての沼田君の自叙伝ではなくして、その周囲におきた色々な出来事を楽しく読ませてくれるので、私は私なりに昔を振り返えさせて頂く機会を得てうれしく思っています。

待たれる続編一般諸賢にも一読をおすすめしたい。

氏はパラナ日伯文化連合会の相談役であり、当会のモデル校兼事務所の現建築委員長でもある。

はしがき

一寸はずかしい、不安な気持の中から思い切って第一部を印刷してみましたら、もう一話もう一話と読んでいる内にもらつた日に一晩で読んでしまったと言う人が何人も出て来ましたので、こんな本でも眼を通して下さる人がいるならと、第二部を印刷する事にしました。

第二部は、ピンガと移民と題しました。カフエーに期待して移住してきた移民が、いよいよカフェザール（コーヒー園）に配耕されてみると宣伝と違って案外に、いや大変に苦しい生活であったり、その内に報われて独立しても原始林の開拓などの重労働であったりした時、飲める者には安いピンガにどれだけ救われたか知れないので、移民史

には忘れては通れない間題と考えて、この題にしました。諸賢の一読を請う次第であります。

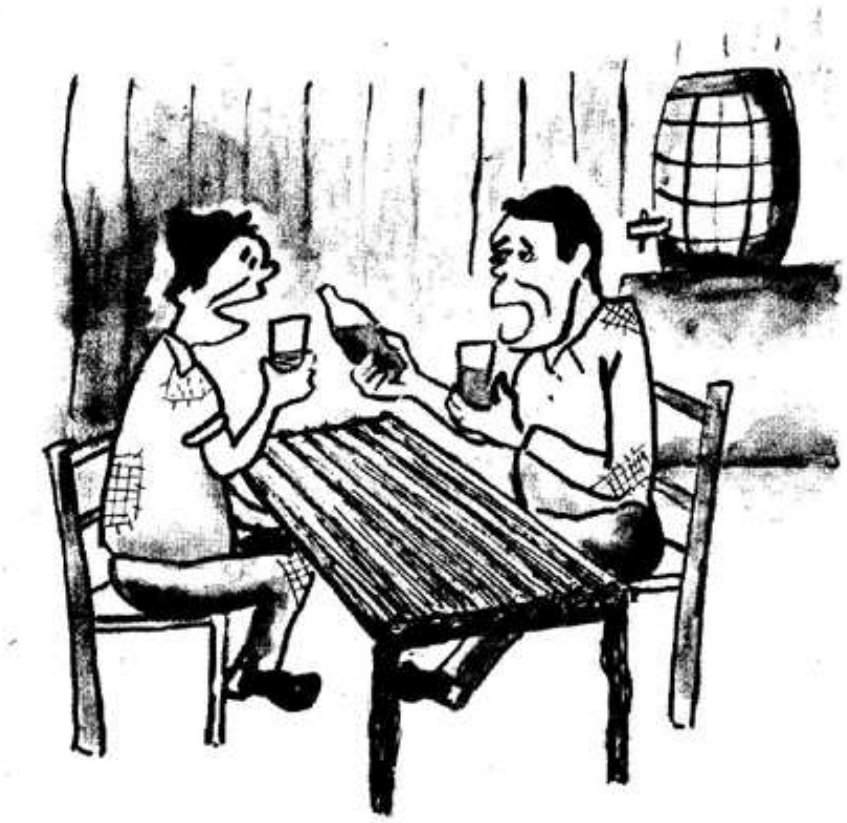
第三部としては、移民は青い鳥を求めて案外に数多くムダンサ（移転）をしている人がいるので「ムダンサと移民」と題してありますが、とても製本にはならないと思いますので、この度の第二部を読んで項ければ身に余る光栄と存じます。

目　次

装帳と漫画・・・・牛窪　嚢
表紙説明：川柳（移住して安かピンガに慰安され）
：沼田信一
序・・・　：牛窪　嚢
ー面白い・珍らしいー続・続を待っている：
：森　昇
信ちやんの昔話・第二部『ピンガと移民』の発刊を祝して
：福島正登
はしがき
第一話　ピンガと移民
第二話　娘三コント：
第三話　ランビーケ：
第四話　突張り・・・・
第五話　グイ飲み（一気飲み）
第六話　砂の目方

第七話　かくれて聞くラジオ
第八話　まぶしい屋根・・
第九話　カメのスキ焼き・・
第十話　ピンガ虫・・
第十一話　道ぶしん・・
第十二話　お話大会・
第十三話　石器・
第十四話　中央区の芸人
第十五話　虎バサミ・
第十六話　面白い給料の査定・
第十七話　名馬盗まる・・
第十八話　ツン張り棒・・・
第十九話　生兵法は怪我のもと
第二十話　鉄砲では魚はとれん
第二十一話　バタタの苗・・
第二十二話　俄か医者になる・・
第二十三話　資産凍結令・・・
第二十四話　栄枯盛衰・・
第二十五話　先輩の苦労
第二十六話　時代に合わす
第二十七話　親心
第二十八話　やれば出来る
第二十九話　パラナピアカーバ山脈に迷う
第三十話　宮村植民地・・・
あとがき

第一話　ピンガと移民



私の父は酒が好きであった。その酒の為に失敗もしてブラジルに移住する事になったと、母には一時期酒は仇のようであったが、私は商売が左前になったのは、昭和初期の数年に亘っての世界的不況が大きく影響しているのが原因で、父の酒が直接の原因ではなかったと思っている。

ブラジルに来てからは飲んでも遊びに行く処がないのでか、父の酒については、母が嫌う様子はなくなって、かえっ

て飲む友達が来ると、気持良く接待をしていた。着伯三ヶ月位にははや三〇リットル位入るピンガのガラス瓶を据えていた。

昭和初期の日本では未曾有の不景気の為に生活苦の余り、やけ酒を飲む者の酒代の為に幾多の悲劇を醸す家庭が新聞を賑わしていたが、此方のピンガ（サトウキビから作る火酒）は強くて安いので大助かりであった。

この酒の為に健康を害ねる者はいたが、酒代の為に家庭争議をおこす様な事は先ず無かった。

セッテ・バーラスのあの山奥でどうして手に入れたのか、その大きな瓶をショイコ（物を背中にかつぐ為の道具）を作って背おいランビーケ（ピンガ製造処）まで買いに父と兄とで出かけていたが、二十五キロ行かないと、ランビーケは無かった筈で途中の売店で分けてもらつたとしても相当遠い処まで出かけていたのであった。父が特別な大瓶を、兄は三・五リットルのガラホン（大ビン）を四、五本位かついで来ていた。

何処にランビーケがあったのか、この文を書きながら、兄に聞いておけば良かったと思うが、その兄も亡くなってしまった。

兎に角『蛇の道は蛇』で飲む者にはすぐにランビーケのある所位は調べがつくらしく、又札幌市の中央の便利な処から移住したからとて、乗り物が無ければ、十キロや二十キロの道のりを遠いからと言って買いに行かずに居られるものではなかったらしく、着伯三ヶ月目位から、あの大瓶

が、デンと坐っていたのであった。ちょつと強いが日本の焼酎よりうまいし、二日酔しないと喜んでいた。

それにしても私の父の飲み方は上品だったから、嫌だと思った事はない。

「酔ぱらつてクダをまく。」と、いう事もなし、他人と喧嘩をする様な事もなく、翌日はきちんと仕事に出るのであった。

飲み仲間には酔ぱらうと、その場で小便をする人がいたが、父にはそんな事はなかった。ただ飲むと愉快になって歌を唄うのが好きで又案外上手であった。

セッテ・バーラス植民地では、山切りを請負った旧移民の古木氏も酒が好きでチョイチョイ来ていたが、又、古木氏の家にも時々、イカ物料理が出来るとて、招いて貰った。

あの臭いラポーゾの料理や、牛の肺の料理などを驚ろきながら食べたが、それは古木氏のブラジル人の夫人の料理であった。この夫人は大変に気性の良い人であった。

一人息子らしい十才位の少年は混血とすぐに解るが、かわいい、おとなしい良い子であった。

二キロは越えていたろうが、僅か十ケ月余りの間に招んだり招ばれたり何回か往復したが、招ばれる度に必ず持参するのは二、三本のピンガである。

ある時、大きなアヒルを持参して来て私の家で料理して食べるという事があった。この時は夫人を連れて来ずカマラーダ（労働者）を一人連れて来てその人に料理をさせ

た。どうして、こんな事になったのか解らないが、飲み仲間の無い古木氏が、何んと言う事なしに考え付いた事であったろうが、私は、アヒルの料理なので初めから安心して食べられるのでうれしかった。

飲んで食べた古木氏とカマラーダはブラジル語の歌も二、三曲歌ってボツボツ帰るかと思っていたら、此処にエステーラ（ゴザの一種）があるから、土間にこれを敷いて寝ると言って、「寝付けにもう一杯」と、コップに一杯を「グイ飲み（一気飲み）」して横になって、寝てしまった。此方も一部屋のパルミット小屋（ヤシの丸太小屋）なので接待の仕様が無いのであった。

ピンガ党には、此のコップの「グイ飲み。」がたまらなく魅力があるらしいが、飲まない者には解らない。

その後、セッテ・バーラスを何回となく訪れたが、再び古木氏に巡り逢う事はなかった。

パラナに移ってからは百リットル入れのキント（樽）になった。近所に北海道の岩内から来た人がいて、気持ちも合い、いつも二人で飲んでは迫分けや博多節などのけいこをしていた。

父が五十六才で亡くなった時、その人は私はそんな若い年で死んではおれんと、言われていたが、後にアサイに移られて、五十三才で亡くなられた。大変元気な人であったので私たちも驚ろいたのであった。肝硬変という事であったから、此の人の場合はピンガが命取りであったのかも知

れない。
　然し考えて見ると、期待して来たコーヒー園の生活が、予想を裏切る苦しい生活であり、都会生活をしていた者がジヤングルの中に飛び込んでの開拓に外人達と競争して、土曜、日曜の返上でかろうじて追い付くというような時代に飲める者にはピンガの一杯が、どれだけ疲れをいやし、淋しさをまぎらわしてくれた事であろうか。飲めない私でも解るのである。
　直径八十センチから一メートルもある大木にマッシヤード（マサカリ）で立ち向った時の親の気持ちはどんなものであったか。子供たちは出来るだけの事であるが親には、どうでも倒さなければならないのであったから、大変な苦労であったと思うのである。マッシヤードの三百回や四百回振った位で倒れるものではないのだ。私たち親子三人で夜明けから日の暮れる迄掛って三本、即ち一人で一本しか倒せない様な木が一アルケールの中に数本はあったと思う。
　そうした荒仕事の夜など、飲める者にはピンガの一杯はどんなに慰めであったか解らない。
　此のピンガの為に命を縮めた人もあろうが、このピンガの為に今日のコロニヤが築かれているとも考えられる。“ピンガと移民”…これは忘れてはならない、日系移民史の一面であると思う。
　アサイの北海道人の二十五周年誌の一頁に『疲れ切った体で戻ってくる夕暮れの空をピリキット（オーム）の大群がピチピチ鳴きながら山に帰って行く。ドラム缶の野天風

呂につかつて疲れをいやし夕餉のメーザでピンガを一杯ひっかけると、死んだ様に床についた』と、あるが、我々開拓者の胸にはジーンとくる一文である。

サンパウロの文協の移民史料館の移民小屋にキント（樽）を据えてあるのは私共に当時の実感を思い出させる。植民地には此の百リットル入るキントを据えてある家が何軒もあった。

日本では想像も出来ない事ではなかろうか。

そしてその樽が現在でも五〇レアール位（五〇ドル位）であるから全く飲める人には天国であったのである。

註　ピンガ一リットル／五〇センターボ（約五〇セント米価）は一九九六年六月の当地の　ランビーケ（ピンガ製造元）渡しの値である。

ピンガ＝砂糖キビをしぼった汁を充分発酵させた後、それを十八乃至二〇度位迄蒸留させたものである。仲々強い焼酎であるが、日本の焼酎よりうまいとは一般の人の言うところであり二日酔いの無いのが特徴と言われる。

此の頃このピンガを少量の水で割りレモンと砂糖で味付けして飲む事が流行している　が、口当たりが良いので、うつかり飲み過ぎて足を取られる人がいる。

第二話　娘三コント

『娘三コント』と、いって、嫁さん一人貰うのに大変苦労したという話は、私達もよく聞いたが、実際は私たちの来る少し以前の話の様である。

私は一九三三年の渡伯で、その頃は、年頃の人は、それ程苦労する事もなく結婚していた様であったから、娘三コントの話はそれ以前の事と思うのである。

昭和に入ってから急激に移民の数が増加して来たが、それ以前は結婚したくも相手の数が少ない上に、当時の移民は一時的な出稼ぎであったので、いずれ帰国するとなれば、親の希望としてはなるべく同県人同志が良いと、いうこともあっただろう。又、一時的出稼ぎの為に男手の方が多かったこともたしかである。単独青年が、家族構成する上で戸籍を貸して渡って来た例も相当あった様である。

そうした事から、絶対数として、娘は少なかったと思う。そうした時代背景から青年も（結納金に）三コント位の金をためて置かないと嫁は貰えないと言う事がいわれる様になったのだと思われる。

そこで、その三コントというのはどの位の貨幣価値だったのだろうかが知りたくなる。

一九三四年頃のロンドリーナの物の相場では、植民地のマット（原始林）を会社から直接買うと一アルケール（約二町五反）四〇〇ミルレースから町に近い所で五〇〇ミルレース位であったから、一コント（一千ミルレース）で、二アルケール余を現金で買えたのである。従って、三コントは大金である。又、三十五年に収穫したアロース（モミ）を売ったのが八ミルであったから、三コントでは三百七十五俵分であるから大変である。私の処では大豊作だったが、とても三コントの収穫はなかったと思う。それでも二コントは一ケ年の経費として欲しいものとの親の話を耳にした覚えはある。それで豊作で食料に不自由しない事にはなったが近所のデルーバ・マット（原始林の伐採）を

請負って小使い稼ぎをしたものであった。

こうして考えて見ると『娘三コント』は、大変な金額であった事が解るのであるが、私達の様に親と一緒に渡伯していたものは別として、単独青年で移住していた当時の若い者は結婚するだけでも相当に苦労したことだろうと思う。

世にいう花嫁移民は、後のコチヤ青年移民の頃からの話で、娘三コントとは時代の違う話である。

そこで一つ娘三コントの名残りを記して此の項を終りたいと思う。

それは私の結婚式の時の事である。妻も仲人もバストスにいたので私が単身で妻をむかえに出かけたのであった。今なら車で二、三時間で行ける処だが、当時は汽車でオウリニョースで一泊しての二日がかりで、その夜か次の夜であったか、妻の出立ちの宴が開かれた。

何人かの挨拶の後で暫くすると、「こんなセルベージヤ（ビール）では、水と同じだ、ピンガを持って来い。ピンガを持って来い。」と、ピンガの注文が出て、ピンガが廻って来ると賑やかな宴になって来た。昔の宴会は今のカラオケ等とは違って手をたたいての賑やかな合唱で大変楽しかった。と、ちょつと一息ついて、座が静まったと思う瞬間、一人の五〇余りの親父さんが立ち上って、

「今日の花ムコ殿の持参下さった、此の雨三コント」

と、大声で叫んだのであった。

私もびっくりして気をつけて聞くと表ではしとしとと静

かな雨が降り出していた。同席の一同は拍手をした。
これも娘三コントの名残りだと思う。此の人、後に妻に聞いたのであるが、時川さんという名前であったが、親戚でも何でもない此の人の名が私には一生忘れられないのである。

註　笠戸丸渡航者の記録では、農場に向った七百七十三人中に、男は五百八十六人で、女が百八十七人とある。
又、サンパウロに残った自由移民は八十八人で、その中に三組の夫婦がいたとある。
この様に初期の移住者には男が多かったので『娘三コント』と言われる女不足の現象が生れたのであろう。

（編集部注・「仲人は　黙って指を三つだし」という当時の川柳がある）

第三話

ランビーケ

東山農場の山本喜誉司支配人が、社長の岩崎久弥氏から日本酒を造って販売する様にとの指令を受けていたにもかかわらず、ランビーケを据えて、ピンガの製造をしていた。この方が市場も広く利益になるという考えであったのであろう。

後田、社長が来られてそれを知り、きつく叱られたという話を、何かの本で見た事がある。

『私が清酒を醸造せよと言ったのは、移民が強いピンガを飲むと体をこわすから、それから救う為に清酒の醸造を考えて、貴方に命じて置いたのに。儲かるからと、ピンガの製造をしているとは何事か。』と、きつく叱られたとの事である。

立派な人は商売するにも、儲ける事よりも相手の為になる事を念頭におくものかなと胸を打たれた。

私は一九四二年の霜に、希望のカフエーを全滅にいためつけられたので、先ずは、セレアエス（雑穀）で幾分でも補おうと、フエジョン（豆）、ミーリョ（トーモロコシ）、アロース（米）に、アルゴドン（棉）も久し振りに五、六アルケール植えてみた。

若し順調にカフエーの花が咲いてくれていたら、今年か

らはカフエーの歩合作者を入れて自分の仕事をへらす考えでいたのであったのだが、霜害の為に再び雑作を全面積に植える事にして切り抜けざるを得なかったのである。これは、隣り近所みな同じ事であった。

中には、もっと早く生産できる野菜などを作る人もあった。それは町に近いからでもあったであろう。

ついでにちょつと書いて置くと、霜後の野菜は大体値の出ない、というより反対に下がるものの様である。それはカフエー作りが、手っ取り早い小使い稼ぎに野菜作りに転向するので過剰になるからであろう。昨年の霜の後、今年も野菜は大暴落で収穫賃も無いという事である。

話を元に戻すが、畠一面にセレアエスを植え付けた頃、誰からか、「ピンガ製造は不景気知らず。二、三アルケールのカンナ（サトウキビ）を植えておけば相当な大家族でも生活に困るような事はない」と、いう噂が立った。

それで、植付けが一段落した頃、弟と二人で近所のランビーケを視察に行った。時々はペスカ（魚とり）に行く近くのリモエーロ川の下流にあると聞いていたので、道では無いのであるが、ペスカドールの通うトリーリヨ（小道）があるので歩いて行くのには別に差し支えはなかった。

二キロも行くとカンナ畠に出た。その近くから道も、歩き易くなったのは、ピンガ買いの人が通るからかも知れない。

カンナ畠の中に入るとカローサ（馬車）の通れる道に

なっている。カンナを運ぶ為であろう。

川から近い処にランビーケが据えられていた。四十五、六才の夫婦が働いていて、愛想良く迎えてくれた。「まず一杯」と、出来立てのピンガをコップについでくれたが、私は飲む前にこの仕事は駄目だとおもった。

それはまだ朝なのにこの夫婦は一杯飲んで真赤な顔をしているからである。仲の良さそうな夫婦ではあった。

お客の相手だ、品物の味見だと、チョクチョク飲んでいたら、どうしても、この夫婦の様に酒に強くなり溺れる様になるのは自然だと思ったら、私たちのする仕事では無いと一見して諦めたのであった。

尚、此の時見たことに関して余談がある。書いて良いものかどうかとためらわれるが、此処のランビーケの施設が非衛生的であったからだろうと、考えなおして書く事にするが、カンナを絞った汁、即ちガラツパを、風呂桶の五倍程もある四角な木造の入れ物に入れて発酵させるのであるが、その中にみみずが沢山湧いているのであった。それがランビーケの中でうだって、ピンガを蒸溜させた後に捨てられるのであるが、二〇センチ程の長さで太いマカロン(ウドン)位の真白にうだったみみずが地面一面に捨てられてあった。始めはなぜマカロンを拾ててあるのかと思ったのである。

此処の主人はこれが湧いてくれるので、味が良くなるのだと言うが、始めて見る者には気持の良いものではなかっ

た。

こんな事で良く許可になるものだと思った。如何に蒸溜するとはいえひどい状態であった。

（後注・発酵させる数日の間にそれほどの蚯蚓が湧くはずはないので、あの蚯蚓がどこからきたか、いまだに良く分からない）

第四話　突っ張り

中央区の一組では、一九三四年の私たち三家族が草分けで、すぐ続いて石川氏が入植。フアゼンダ・コアチからコルゴ（小川）を渡って入ったのであるが、翌年中野氏、石塚氏が入植される頃には、本多氏の家の前を通って最後の大西家まで殆んどまっすぐに車の通れる連絡道を開いたので、大変便利であった。どうしてか他の組には、一組の様な便利な道はあけてなかったので、何かの連絡でも車では一々カブセーロまで出てから次の家に行かねばならず不便であったから、連絡には歩いて行ったものである。曲り

に曲った道のあいていた所もあった。

三十四年には本多氏も二アルケール位連絡道から下を開いて契約者を入れ、市山氏も開拓を初められた。三十六年には中野氏、三十七年には中野氏のシツチオに六年契約で方成砂雄氏が入って来た。小柄だったが元気の良い人であった。

フオルマ・カフエー（カフエー育成契約）に入ったのであるが、私の家と同じ様にカフエーの手入れは下手の方であった。パトロンの中野氏は、立派なカフエーを育てていたので、契約者も楽でなかったろうし、パトロンも良い気持ちではなかったかと思うが、契約者の不満を洩らした事はなかった。

どちらも元気な人であった。

中野氏は少年で移住してきて、日本語の教育を受けていないのが気になっているらしい風であった。その為かどうかは知らないが、一杯飲むと、「俺は九州男児……。」を、連発するクセがあった。然し喧嘩をする様な事はなかった。

子沢山で大変だったろうが、良く働く人で生活は安定して居られた。母子揃って歌の上手な人達であった。

隣りの石川氏が、後日シッチオ（所有地）を三、四千メートル前後のシヤーカラ（小農地）に切り売りしたが余り儲からなかったので、私は失敗しないと息子さんが頑張って居られたが、土地を離す時には何か大きな失敗をしたらしかった。町の近郊ではシッチオがダッタ（宅地）になってメートル坪で売るので儲かりそうであるが、失敗す

る人の方が多いものの様である。
インフレが激しかったからかも知れない。
　然し私が此の項で書こうとしている「突張り」は、宅地分譲とは何の関係もない事である。
「突張り」のクセは、契約者の万成氏にも少しではあるがあった。昔は宴会でも、又組の集会でも、一杯飲むと、よくしやべり出す人、泣く人（泣き上戸）、からんでけんかをする人、うれしくなって歌う人、それぞれがクセの出る迄飲んだものであった。
　日本全国から知らない人が集まったので、自己主張というか、自己宣伝をしたかったものか、どうしても少し荒かったが、それだけ元気もあったから、百姓の経験の無い人にもあの原始林の開拓が出来たのであったろう。

　そこで題名の「突張り」であるが、その一例を記しておきたい。
　この時は中野氏の契約者の万成氏であったと思うが近所にカザメント（結婚式）があった。
　市山巌氏が、「此の間の新聞記事に、日本で飛行機に利用するのに大変固い軽い金属を発明されたらしい……。」と話題を出すと、それが近くにいた万成氏の耳に入った。万成氏は契約者で、新聞を見ていなかったのか、年若い者が知識的な話をするのが気に入らないらしく、「何だと。」と突っかかってきた。
「昔から堅い物は重い、柔かい物は軽い事に決っているじや

ないか。新聞がどう書こうと、そんな事にだまされてたまるかよ、ええ。」

と突っかかる。誰かが「それでも、柔い水は案外に重いし、軽い綿でもハサミで切るのにも案外切りにくい。」と、言うと、

「何だと　ー、水と綿だと　ー　そんな物が比べ物になるかってんだ。そんな根性で開拓が出来るかよ、ちょっと字が読めるからって、つまらない理くつをこねやがって、ええっ、明日マット（ジヤングル）へ行って、木を切って見りや分るじやないか、柔い木は軽い、堅い木は重いだろうが。分かり切った事じゃないか。話をするなら、もう少し理くつの通った話をしろい。」

無理が通れば道理はくぼむ。「そうだ、そうだ。」と道理を引込めて、歌でも歌おうと空気を替えないと争いになってしまう。

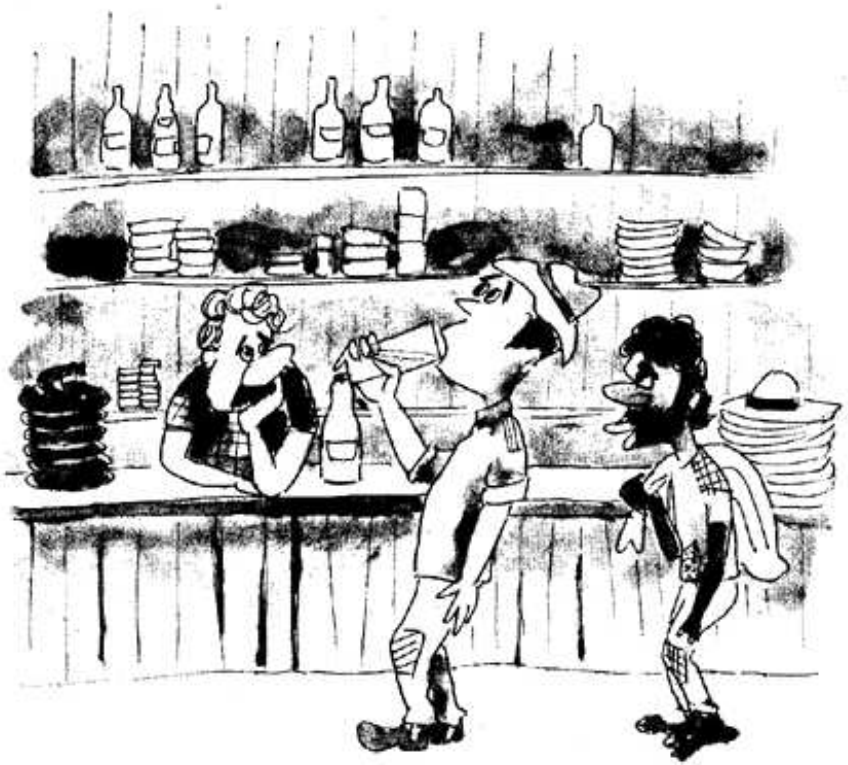
然しへ理屈で突張る人はいたが、あの当時の先輩たちが、何程の資本も持たず、体を資本に良くも開拓をしていったことを思うと、あの突張りや多少の喧嘩など、やり切れない気持ちのはけ口であったのかという気がする。

それに強くて安いピンガの力も大きくあずかったと思う。その為に短命に終った人もいたであろうけれども。

カザメントの酒がセルベージャや日本酒に変って来ても、宴がたけなわになると「オーイ、ピンガ、ピンガ。こんな水臭いものではだめだあ」となるのであった。

突張りに、ピンガ、懐しい思い出である。

第五話　ぐい飲み（一気飲み）



グイ飲み＝（一気飲み）、一合より少し余計に入る位のコップでグイグイグイと一息飲みをする人が居り、又、その人にはこの飲み方がたまらなく魅力が有った様である。

グイグイ飲んだ後でどうしてか底の僅かを土間に捨て、更に渋い顔をしてツバをパッと吐くのである。飲まない人には一寸汚い感じである。そこの家が土間であれば、他人

の家の中でも吐くのである。

習慣だから此方もなれてくる。そしてその渋い顔が治るとアアツと全く満足そうな顔をするのである。余程うまいらしいのであるが、此のグイ飲みをする様になった人は、体をそこねた様であった。強いアルコールの為に肝臓を痛める様である。アルコールの度合いは二十度前後であったらしい。

私の兄も四十前後に飲む様になった。三人の弟たちが飲まないので初めの内は遠慮して一寸かくれて飲んでいる様であったが、その内に私達が別の土地に移ったので、それ程、飲んでいる姿は見かけなかったのであるが、次第にグイ飲みをする様になってさすがに兄弟一番の元気な体であったが、肝ぞうを痛めてしまったのである。

医者にピンガが命取り、今やめなければ長くは持たないと言われて、ピタリと止めた処は兄の偉さであった。

元の体にはなれなかったらしいが体も太り普通の健康体に見える姿で七十七才迄保て、死因は肝ぞうではなかったのである。

今、亦、入植当時を振り返って、中央区（ロンドリーナ市郊外）植民地の酒の好きだった人を思い出して見ると、市山寅太郎、平田文太郎、に私の父沼田小一郎、万成砂雄、中野健治、錦田助三郎、頼則善衛、梶原利助、遠国寿治、原豊五郎、荒長十郎氏等十人程思い出すが、中野、頼則、遠国、荒氏らは酔ったという程飲んだ姿は思い出さない。

飲んだのはその他の人である。平田氏は、朝畠の仕事に

行くのに水のかわりにピンガを下げて行くなどと噂は有ったが、実際にはそんな事はなかった様で朝のカフエーの時にカルス（小コツプ）に一杯飲む位の事は有ったらしい。

市山寅太郎氏は日露戦争の出征兵士で特務曹長中々の人情家で植民地の御世話を良くして下さった。平田氏も日会の会長を何期か勤められている。この人達良くピンガを飲まれたと言うより楽しまれたのである。

その為に寿命を縮めた様な事はないのである。梶原利助、原豊五郎氏らにしても相当の寿命を保ったのである。

ピンガの為に短命で亡くなったのは肝硬変と診断の出た錦田氏一人で、短命であった私の父をピンガに飲まれたと噂する人がいたが、五十六才の寿命ではそう思われても無理はないが、父の死はピンガではなかったのである。父の飲み方は上手で、飲めば愉快に歌って場を賑わせて、決して飲み過ぎで体を痛めるような事はなかった。

父は渡伯して二十日目位かに原始林の中で木を倒していた時、直径三十センチ程の木が、受けの切り込みが浅くて切り日から倒れずにさけ上ったので、危ないと思って逃げようとした時につるに足を取られてころんだその上に、さけ上った木が落ちてきて胸を圧えられた。ところが幸いに下の土がやわらかくて自分で上半身を抜け出して来る事が出来た。その抜け出したところへ私がその脇の木を切る為に近よって行ったのであった。

父は此の木の下になったが幸いに助かった。

アバラ骨も折れていないから、さわっても痛くもないし大丈夫だ、と、言ってその日は急いでパン粉を酢（す）と卵の白身で練ってシツプをしたが、翌日からは又仕事をしていたのである。五年後亡くなる時、医者が肺を痛めていると診断したのは此の時にキズがついていたのではないかと私は思っているのである。

もう一つ父の短命に終ったのには、ブラジルの食事が口に合わないと言って、バカリヤウ（干鰭タラ）をいつもむしって酒のさかなにしていたが、肉や油にしたしめなかった上に開拓初期の仕事がどうしても重労働であったのが栄養不足を来たしていったもので父の場合には決して、酒が命取りであったなどとは思われないのである。

父はピンガに救われたのであって、ピンガに罪はきせられないのである。

二度程どぶろくを作って、口当りも良し、うまいと言って飲んでいたが、どうも二日酔するといって、自由に作れる当地の事情であったが、三度とは作らず、結局ピンガを愛飲したのであった。

いつも土間に百リットルのピンガ樽が据っていた次第である。

第六話

砂の目方

パラナに来て肥沃なテーラ・ロッシヤのお陰で、町に生れて学生であった私たちが、突然農業で生活する事になったのに、何の心配事もなく、かえって、植えればとれるという農業が全く楽しかった。

九月に入ると、フェジョン（豆）を蒔き、二週間程して、その中に、ミーリョ（トウモロコシ）を植えて置くとミーリョが一メートル位になる頃、フェジョンの収穫をすまして、一通りカルピ（除草）をすますと1月の末になる。その頃になると、ミーリョも実が入って、ドウブラしてよい時期となるので、ミーリョをエスピーガの下あたりからドウブラ（折り曲げる）して、再びその中へ、フェジョンを植え込むのであるから三毛作になる。

アロース（稲）やアルゴドン（綿）もある程度は植えたが、殆んど雑作は、フェジョン、ミーリョの三毛作であった。

四十二年の大霜で、カフエーが全滅した時も、翌年は待望の一千俵のカフェーを収穫出来るかと予想していたので大変残念に思った事であったが、此の年分家する以前の弟たちの畠の雑作が、カフェー一千俵分の収入をあげたので母は大変に喜んでくれたのであった。

こうして、テーラ・ロッシヤの恩恵に喜んでいたのであったが、その後、カフエー景気のお陰で、仕事が拡張されて行く内に、アレーヤ地帯（砂質土）にまで仕事をひろげる事になった。

当時一九五〇年から六〇年代のカフエー好況時代には、パラナ州のカフエー栽培地帯はグワイーラからイグアスー地方迄洪水の様な勢いで、それもマッシャド（マサカリ）とフオイセ（大鎌）の人の力だけで開拓されてしまったのであるから、好景気の力は恐ろしいものである。

多くの人はマット・グロッソの土地も買ったのであった。

私はマット・グロッソの良い土地よりも、今のカフエーの好況の内に開拓出来る、近くのアレーヤ地帯の方が良いと思って、グレーバ・タペジャーラの中に買った。

パルミットが相当にあって林相もまあまあの土地で、カフェーも順調に育ってくれた。近所に日本人の植民地があって、立派なカフェーを育てているし、その人達はサンパウロ州のアレーヤ地帯から移って来た人達で、尋ねて見ると、此処の地味は良いから二十年は大丈夫と喜んでいるので、こちらも幾分安心はするものの、とにかく砂が多いので、頭の中から不安は去らないのであった。

それで或る日、砂は多いが、その砂の中に何割土が有るのか量って見ようと思いついた。

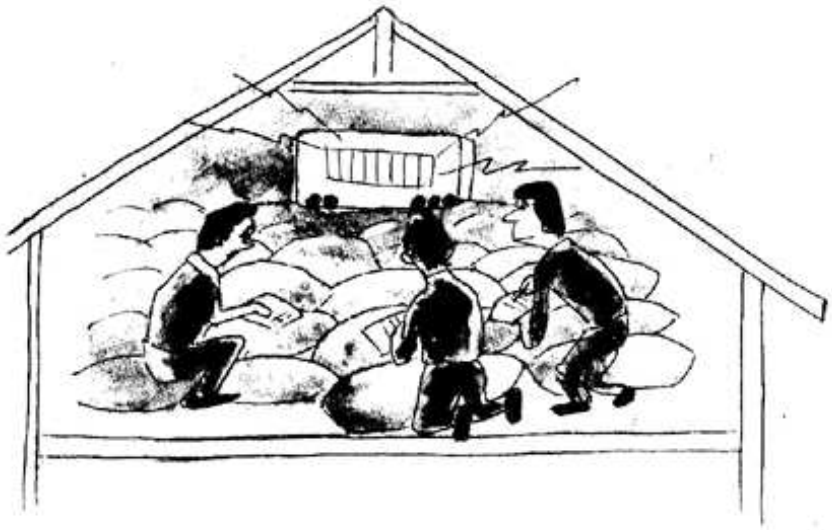
そこで、一キロの土を、目の細かいパンノ（布）の袋に入れて、良く洗ってみた。土は溶けて流れ出て、袋の中には砂だけが残ったわけである。その袋を屋根のテーリヤ

（瓦）　の上に置いて良くセッカ　（乾燥）　させて、その砂の目方をはかってみて、びっくり仰天したのであった。なんと、その砂の目方が九五〇グラムあったのである。

　こちらのフアゼンダにいれば百％が土であるのに、砂地では五％の上にあると思えば、何とも淋しいものと思わせられたが、カフエーはかなり順調に太ってくれるので、今迄に造った事の無い、広いテレーロ　（乾燥場）　に将来カフエーマキナ　（カフェー精選機）　を据える為に、床下からカフエーを出せる様に計画した倉庫等の準備に追いまくられていくのであったが、その内に此のフアゼンダで一人の弟が独立した。

　五％の土の上のカフエーであるが若い内は相当に実ってくれたのである。

第七話　隠れて聴くラジオ。



私たちがラジオを聞く事ができるようになったのは案外に遅く、一九四一年、戦争の始まった時にはまだ植民地には殆んどラジオは無かった。

思えば戦争が中盤頃と思う四十三年頃か、近所の人からラジオを聞く仲間に入らないかと誘われて仲間になった。中心は、西電気商会の初代社長の西正造氏であったと私は思っている。

仲間はオフィシーナ（車の修理工場）の中村氏、シャーカラ（小農）の大西氏、大工の高木氏、中央区の隣りの石川氏と私、他にも仲間はいた筈であるが、知らされていなかった。

十日程宛、廻り当番で場所を替えて、聞いた人が、ニュースを書き取って仲間に廻す事になっていた。ラジオは立派な物ではなかったが、割合に良く聞こえた。しかし困る事が二つ三つあった。

先ずはバッテリヤの充電である。自動車のものであるから、なかなか重いのであるが、「エストツパのサッコ（麻袋）に入れて軽そうに持って来い。車を持っていないのにバッテリヤを持っている事が判るとすぐラジオも持っているとばれるからな」と、時々、西さんに注意されたものであった。

二つ目は聞く場所であった。私と石川氏は、石川氏のカフェーのセッカデーラ（乾燥用建物）の天井裏で聞いたのであるが、三〇センチ位の狭い所を垂直に三メートル程登るため、足を自由に曲げる余裕がないから苦労した。着物のよごれるのは、仕事着で行くのでまだよかった。

アンテナは棟瓦の横に這わせたので人目にはつかなかった。そしてカフェーの上に腹這いになって聞いて、石川さんがノートして仲間に連絡したのであった。

大工の高木さんはシャーカラの休み小屋（畠の中間）の地面に穴を掘って、板でフタをして、その地下室で聞いていた。他の人々もそれぞれ苦心されたのだと思うが、聞

いていたおかげで、ニューギニヤの戦いが、途中転戦作戦に入ったことを知り、その頃から不安があったので終戦後の戦勝ニュースにも迷う事もなかった。此のラジオのお陰と深く感謝しているものである。

思い起こせば、『ニューギニヤの東端の軍港ポート・モレスビーの陥落がいよいよ時間の問題です』とのニュースで、今日か今日かと、ラジオにかじりついていたが、仲々落ちない。そうした或る日隣りの英国人のフレーザ氏に会ったら、「沼田さん、いよいよ日本軍の退却が初まったから、近く日本は負ける」と言う。私は、「そんな事はない。日本は負ける戦争は始めからしないと思う。」というと、「勝つと思って始めても此の戦争は敗ける。若し日本が勝ったら、私のフアゼンダ（農園）をあげるが、日本が負けたらあなたのシッチオをくれますか。」と言われたが、私は「イエス」との返事は出来なかった。それは、私はそんなカケ事をする考えは、もうとうないし、加えてかくれて聞いているニュースで、ポート・モレスビー包囲戦の力が尽きて破られた事を知っていて、日本軍の苦戦が心配になっていたからであった。

終戦の天皇のお言葉は、私たちの聞く順番でなかったので此のラジオでは聞かなかったが、別の人のラジオで聞き、感無量であった。

然し、終戦後一週間もしたかと思う頃、早くもデタラメの戦勝ニュースが流れて来て相当の数の人が被害を受ける事になったのである。私達は西氏のお陰で難を救ってもら

つたのであった。
当時の西電気商会はアベニーダ・パラナの始まりの、現在高比良氏のパステラリーヤの隣り辺りであったが、後にルア・ウーゴ・カブラールを三、四クワルテロン下った角に移り、更に発展をしながら拡張を続けて、現在はＢＲ（国道）三六五に大工場を息子さんが経営していられる。
やせた細い体の人であったが、芯の強い、真面目な人であった。

第八話　まぶしい屋根

ロンドリーナ市も一九四四、五年頃になると、戦争中にもかかわらず、めざましい発展を続けて、押しも押されもしない北パラナの雄都を誇っていた。その近郊に住んでいた私たちは町に一軒の自分の家を持ってもいないのに、何か誇りみたいなものを感じて、安心していたようである。
その頃、中心街に一軒の珍らしい家が建った。場処は現在のセントロ（中心部）のバンコ・ド・ブラジルの敷地であったと思う。
その時の持主は、外科医で有名なドットール・カイオ・モレイラ氏であった。何が珍らしいかというと、その屋根を当時は珍らしかったアルミ葺きの上、その屋根が地形なり

にルア・セルジツペに向って相当に長く葺き下げたのであった。

始めてそこを通る者には目を見張らせる建築であった。然しまたルア・セルジツペから見ると、その屋根のアルミ板に太陽の光が反射して全くまぶしく、大きな迷惑と感じ、土の瓦に葺き替えてもらいたいものだと噂する何人もの人に出合ったものである。

私も見てその反射の余りの激しさに、これでは大変な迷惑だと思った。

然し相当な苦情を聞いた事であろうが、此の屋根葺き替えられずに年を重ねていくのであったが、二年もした頃か、いつの間にか、このアルミ板に白い粉でも吹きかけた様に風化?して、反射しなくなったので、それと共にこの家の事は忘れられてしまった様であるが、此の家なかなか珍らしい、相当に金もかけた立派な建築であった。

然し折角建てた立派なその家も場所柄から長く保てず、バンコ(銀行)に買収されて取りこわされてしまったが、あるいは何処かに移されているかも知れないと思える程、木造の立派な家であった。

それから何年かして中央教会が現在の姿に改築されて、あの大きな急勾配の屋根が又アルミで葺かれたのである。

これまた大変に反射して相当遠方の人々までまぶしい思いをしたのであるが、前のドツトール・カイオ氏の前例が

あるので私たちは何んの抵抗も感じなかったし、一般からも余り批判は聞かなかった様であるが、あったとしても、前例があるので、説明すれば理解は得られたわけである。

アルミの風化?は、鉄板のサビと違って、平均にくるので美観を失わないので良いものだ。

その後、我々のアツセル（ロンドリーナ文化協会）の会館もアルミ葺にしたが、もうその頃では反射の事など噂にも出なかった。

唯大衆の集る処では雨の音が響いて困るものだ。

教会はイッペ材で天井を張ったのでお祈をしていても雨音は通さないが、天井の張ってない我々の会館は催中に雨が降ると大変だ。何んとか会員で出し合って、天井を張りたいものだ。

一会員、一米坪の標準で寄付してもらえば出来る事だし、出来上れば、まったく立派な会館となるだけでなく、何を催しても安心である。

第九話　カメのすき焼き

日本から来て二、三ケ月の頃の事であった。

ある日隣りの同船者の大西氏から、

「今夜ジャンタ（夕飯）にかめのスキ焼きをするからパルミット（ヤシの木の芯・野菜代り）を持って来て下さい。」

との連絡があったので、珍らしい事もあるものだ、大西

氏は親子七人、私の家は九人、計十六人で食べる（かめ）とはどんな大きなかめかと、不審に思いながらも、とにかく行く事にした。

パルミットを持って来るようにと言うのは、私の家の隣りのロッテにパルミットが林立しているのに反して大西氏の近くには無いからである。それでパルミットを十本程取ってきて、まだ明るいうちに出掛けた。四〇〇ｍ程の近い処であった。

着いて驚いたのは先ずかめの大きさである。ランバリー（一、二寸のフナに似た小魚）を捕る胴（コーボ）に入ったというのでも解るが、ごはんを食べる皿の大きさ位のものであった。

コーボの入口は少し大きい魚が押しはいれる様になっているので無理矢理に入ったものであろう。さらにこの時おどろいた事は、その亀が首を引込める時日本の亀の様にまっすぐにせずに横にくの字に曲げて頭をかくす事で、処変れば何でも変るものだと話し合った事であった。

さて誰が見ても此の亀では百グラムの肉がやっとで十六人にはとても回らないと思っていると、フランゴ（若い鶏）を一羽つぶすとの事で向いの外人から買って来てあった。

此の時のフランゴの首を切った光景がいまだに忘れられないのである。大西さんの長男繁雄君が十才位であった、その子にフランゴの足と頭を持たせて、大西さんが、マッシヤード（マサカリ）を持って裏庭の木のトツコ（切り

株）の上で、スポッと、首を切ったのであった。頭と足をつかまれて動けなかったフランゴが、頭の無い首から血を吹き出し乍らバタバタと大暴れすると繁雄君もおどろいて手を離してしまった。地に落ちたフランゴは首から血を吹き出しながら十数m走って行って倒れた。幸いに私たちの方に来なかったので血をかぶらないですんだが、かわいそうだと思った。でもしかたがない事だと考え直してスキ焼きを御馳走になったのであった。

ショーユも味噌も無い時代に、隣人をよんで塩と砂糖でのスキ焼をした事を見ても、日本から出る時に顔を知った上同じ植民地に行くという事だけで、お互いがどんなに頼り合っていたかが思わせられる。一緒にロンドリーナまで視察に海岸山脈を百キロメートルも徒歩で往復し、引越しもいっしょ、入植もいっしょにしたが、戦争が始まった時から、氏は別行動を取る事になり、一時は大成功したのであったが、戦争が思ったより長引き、尚敗戦となった為に予定の引上げが出来ずに一時期苦労した様である。その後子息がシャングリラのメルカードに青物果実の店で成功し、お孫さんは歌謡のセルジオ君で、現在は旅行社を経営し日本からくる、フッテボールに未来をかける青少年の世話に奔走している事は衆知のこと。九十余才の信太郎氏も満足の晩年で喜ばしい事である。

余談になるが、カメのスキ焼きの時、フランゴを分けてもらつた外人ともう一軒イスパニヤ系らしい家族が居て、

私共も日本からもってきたちょつとした物をみやげに言葉は通じないが遊びに行ったものである。向うも何んの嫌な顔も見せずに、カフェーやピンガを出して結構歓待をしてくれたものであった。カフェーをフライナベで煎る事も、その人達に習ったものであった。

が、その時既に彼らは、何十年も前から此の山奥に入って開拓をしていた処へ、日本の海外興業株式会社が力で政府より払い下げを受けて分譲し、日本人が入って来たので、権利は先に現地入りして開拓している自分達にあると訴え出ていたのであった。先に書いたイスパニヤ系らしいペードロと云う者が中心で大変狂暴であるから気を付ける様にと、後になって会社から通知されたのであった。更に彼らはピストルも鉄砲も持っていた。

全く卑怯な会社の役員達である。土地の選定の時には地図にいたずらに線を引いて鉄道の予定線とごま化し、入植する前はその土地に係争中の狂暴な先住民が住んでいる事を教えず、資本投下をして動けなくなってから注意にくる横着なやり方である。

幸いに私たちは、八月に入植して十二月にはパラナに移る事になったので、事件は起こさず　に済んだし、彼らには出来ない面積の開拓と大きな家を残して来たのでかえって喜んだ事であろう。後日訪ねた時、彼らの子孫が我々の立てた家で暮していたのであった。

第十話

ピンガ虫

第一話に植民地内には何軒にも百リットル入れのピンガの樽がすえられていたと書いておいたが、事実酒の好きな人は勿論ながら、お客の出入りのある家では、自分は飲めなくともお客の為に置いてある家もあった。今頃のお茶菓子みたいなものであったのかも知れない。日本の人に聞かせたら何んとも豪勢な話であるが、あの移民当時の貧乏時代には此の安いピンガに助けられたのであった。

その安いピンガを一樽持って来てもらうと百四、五十枚のセーロ（消費税印紙）を持参するのであるが、此の消費税のセーロが何回でも往復するのであった。いわゆる脱税である。安いものが更に安くなったのであった。

さて、そのピンガであるが、一口飲もうとカルス（ピンガ用の小さいコップ）につぐと、よく二ミリ程の虫が飛んできてそのピンガの中に飛び込むのであった。固い茶褐色の虫で特にピンガに飛び込むので我々は虫の名を調べもせず、唯、ピンガ虫と呼んでいた。

一寸指でつまみ取るか、箸でつまみ出すのであるがご飯粒の五分の一程の全く小さいが、案外に固い皮の虫であった。

このピンガ虫、此方が飲む時に、俺にも一口とお相手に来るのはうるさいが、まだ良いのであるが、夕飯迄はとて

も待てんと、直接樽に挑戦する事が有って大損害を蒙ったのは私の家だけではないのである。

開拓時代であるから何処の家もヤシ壁か、ドロ壁の家で床は土間であったから、五十センチ程の丸太二本を台にしてその上に樽を据えて置くわけであるが、呑ん兵衛のピンガ虫、その二本の丸太の間、即ち底から攻撃を開始する事が多いのである。中身を引出すのには一番効果的である。

直径一ミリ少し自分の体がやっと、入るだけの円い穴をあけてピンガに向って突進するのである。やっと針でついた様な穴があいてやれやれと腹一杯飲むのはまだよいのであるが、その後をふさいで置いてくれないから一大事である。小さな穴からしみ出るピンガが土に吸われるので此方に気がつかない。誰かが、と、いっても、飲む者でないと気が付かないのであるが、どうかした拍子に「アリヤ、もう空になっている、何月頃迄は持つ筈であった。」と、言ってみても、夜となく昼となく土に吸われていたのであるからかなわない。如何に安いピンガでも、ピンガ虫にしてやられたかと癪を起した経験は軒並でなかったか、と思う。

ピンガに始まったコロニヤのアルコール文化は清酒へと入りそうにして入れずビールへと移った。ウイスキーも相当なじんで来たがやはり一部でしかない。

却って此の頃元のピンガに戻りそうな気配を見せているのは、誰の発案か、ランビーケで蒸溜した物をビン詰めにして、密封し、地下室に二、三年ねかせて置くと、口あた

りの良い味になっているのである。その内にこのピンガの保存で、ウイスキーに挑戦する人が出てくるかも知れない。

私共のロンドリーナ・ゴルフ・クラブでは三百リットル程埋めてあるが、時たま取り出して味見をすると、確かに口あたりの良い物に変化しているのである。

然し所詮酒であるから、余りすすめない方が良いかも知れない。

第十一話　道ぶしん

私たち三家族（沼田、大西、加藤）は、ロンドリーナにきて初めの間はコアツチーのフアゼンダから勝手にフアゼンダのマット（原始林）の中に小道を開けて、小川を渡って自分のロッテに通っていたものであるが、セレアエス（穀物）の収穫をする様になると、出荷の際小道を一

俵宛かつぐ事は大変であるから、コルゴ（小川）から一五〇メートル程の地点に車の通れる道を開ける相談になり、不在地主、二家族には仕方がないので無断であったが、道をあけたので大変便利になった。尚入植初期であったのでお互いが施設を作っておらず、道が出来てから、それに合わせて、施設が作られたので一組は此の点誠に恵まれていた。中央区内でも一組の様に便利に組内の連絡道の出来ている組はないのではないかと思われる。

道は大変に都合良く相談がまとまって出来たのであるが、やはり人間の世の中で都合良くまとまったと喜んだのは私たちのように町から見て奥の方にロッテを持つ者の事で、町に近い人は、自分の家から町に向って道があれば足りるので奥の者が余り家の近くを通ってくれない方が良いと思う気持のおこる事も考えられる。

ともかく相談がまとまって道の場所を決め、植民者総出で立派な道があいて、私達は町へ出るのに、細い道を川をまたぎ、マットの中を通っていく事をしなくとも立派な道路を行く事が出来るようになった。その上少し重い物を買った時にはカローサ（馬車）をやとつて持って来る事が出来るのでその便利さをよろこんだものであるが、折角作った道も日が立つといたんでくるものである。

そこで組長さんがレウニオン（集会）を招集して道修繕という事になる。

始めの間はそうして総出で修繕していたがその中に、急用？が出来たとて出て来ない人もあり、同じ人でなくと

も、度々誰かが欠けると、どうしても不満が出てくるもので、衆議の結果自分のロッテ内は自分で修繕すれば良いと、いう事になった。

「それが一番良い方法だ」、と意見が一致したように見えて決定したのである。

然し世の中には一番良い誰にも不平の無い方法など、とても無いものの様である。

とにかく各自が自分のロッテ内を修繕する事に決ったので、公平な様であるが、そうはいかないものである。道となると必ず上り下りが有るもので、高い処を持っている人は良い方で低いロッテには畠が古くなる程、泥水が流れてきて大変である。

又、平な処の人は少しくぼみに水がたまり出すとそれが次第に深くなって困る様であった。

その中に、自分の家から町に向っては修繕するが奥に向っての部分は修繕しない人が出てきた。

案外に広いロッテの持主であった。次のロッテの人が、尋ねて見ると「奥の者が修繕すれば良いだろう」との事だったそうである。

それで奥の者の相談が開かれたが、僅か一人の部分の半分の修繕だからみんなで行けば十分か二十分の仕事だから、行ったり来たりの時間つぶしの様なものになる。気の毒だけれども、そのロッテの隣りの００氏に無理におねがいして修繕してもらう事になった。人も良く働き手も多い人で、

「それでは私が修繕して置きます」という事になって、落ち着いたが、今になって見ると、無理を通した人も、無理を引受けた人も亡くなってしまったが、どちらかというと無理を引受けた人の遺族の方が、世間の信頼も受けて幸せの様だ。

第十二話

お話大会

お話大会を昔話として書こうとすると、お話大会はまだ新らしい現代の催と考える人が多いと思う。

アサイのお話大会が今年（九五年）で第二十五回、パラナ大会が同じく第六回である。

ところが、ロンドリーナに於けるお話大会はまだまだ古い時代に催されているのである。

ロンドリーナ教育研究会の十周年誌によると、第一回お話大会は一九五六年十一月三日に当会の試みとして催されたのが第一回で、続いて毎年行われ、五十九年に第四回目となり、此の年全伯大会に八名出場、七名が入賞したとある。

ところが、思い出して見ると、此の記録は教育研究会の

記録であって、ここでフレーザ校の我妻義四郎先生が協力なされている様子が伺えるが、此の先生は多分にフレーザ植民地に於ける青少年の童話会の影響を受けていたのであった。

その童話会とは、一九四八年二月、フレーザ区の青年会が、青年の勉強の為に何かをしなければと現在アラポンガス市に居住されている人で、長い間大工職をして居られた小谷野君と、その後マリンガ市のシャーカラに移られた林君ら青年の正、副会長が考えついたのが、フレーザ青年会の童話会であった。

これは子供のお話大会の前身である。お話大会とは少し趣きが違っていたとすれば、出演者が青年たちであった事である。というのは青年の勉強の為に、幼少年に集まってもらつて青年がお話をして聞いてもらおうという事であった。

当時、終戦後間もない時代で、青年会には若い少年らしいものまでが入会していた。戦争は終った、何かをやらなければと、模索の時代であった。始めは尻込みしていた者も次第に出場する事になり青年総出場する事になると女性の方からも希望者が出て来て、結局三十名余りの出演となるのであった。

招待状はフレーザ植民者にとどまらず、近郊の植民地にも送られたらしく、ロンドリーナ市内の誉学園に送られた一枚が保存されているので想像する事が出来るのである。

かくして第一回童話会は一九四十八年二月六日、繰上げ

紀元節の式後、大久保氏の養蚕小屋で行われたのである。

青年達は各自の家庭で、又時々は集まって練習を重ねていよいよ当日を迎えて吃驚りするのであった。

「当日の小谷野会長の挨拶を思い出すのである。」と、弟の政治が話すには……

青年は何事をするのかと心配したのか集まったのは大人の数の方が多い様な状態であった。

そこで会長は、『僕達の勉強の為に小供達にお話を聞いて頂きたいと考えて居りましたが、今日は子供でなく大供が大勢集まって下さいましたが、どうか子供になって聞いて下さい』という挨拶で始まったのであった、……と、言う事であるが、そういわれると、私も思い出すのである。

それから一年とたたない年の暮れの十一月二十三日に、第二回の童話会が催されたのであった。

プログラムは前回を上廻る盛況であった為に、直ちに第三回目が計画されて翌年の天長節を卜して催されたのであった。

三回目になると青年たちに場なれがして来て歌や寸劇等取り入れて、少し演芸会的に変化していく様子が感じられるのであった。

第四回目には私も余興に出場した覚えがあるし、第五回目にも出場している記憶がある。してみると、フレーザ植民地の童話会は国際植民地のお話大会の創草期のものとして記録さるるに値する物の様である。

此所に第一回目のプログラムを進行状態に従って書き取っていた大久保昭二君の手帳から写したものを掲載して置く事にする。懐かしく思って下さる人が何人かは居られる事と思う。

地方からの見物客の見えていた覚えもある。

見物と言うより、どの様な事をするのか、参考にすべく視察に来られていたのであった。

第一回　童話会　フレーザ区男女青年合同

（昭和23年2月6日午後3時より一紀元節の式後行なわれる）

（プログラム）

一、浜本　正美　イッテ、マイタ豆
二、広瀬　和江
三、富田　清義　転げ出したおいも
四、浜本　美津江　サルとカニ
五、大屋　幸市　雨だれ石をうがつ
六、山田　チエ子　大熊星
七、西村　三郎　サラクーラの生け捕り
八、加藤　綾子　読書（孝）
九、宰川　陸朗　うその薬
十、山田　千江子　総ての物に感謝する
十一、大久保　剛　のん気な魚や
十二、廣瀬　和江　金と王様
十三、吉永　鹿治　よくばり狼
十四、廣瀬　幸恵　三太郎
十五、沼田　吉太郎　兎吉と兎おどり
十六、富山　登志子　オンサの裁判
十七、大久保　昭二
十八、大川　澄江
十九、松隅　四郎　正直な馬方
二十、吉永　定子
二一、富田敬市郎　頭のてっぺんに木が生えた
二二、西川　清子
二三、浜本　正美　着物はぼろでも
二四、合　唱　三名
二五、加藤　雪子　良い日本人
二六、浜本　美津江
二七、
二八、吉永　笹恵
二九、加藤　ヤス子　良い日本人
三十、廣瀬　幸恵　数読み問答
三一、二名にて　数読み問答
三二、二名にて　数読み問答
三三、
三四、松隅　絹江
三五、
三六、富山登志子・大川すみ恵　歌
三七、
三八、山田・吉永　かけ合い問答
三九、
四十、富山　享　金剛石（ナポレオンの話）

（註）空白の部分は付け落したものであろうが、それとも、出場者が発表をしなかったのか、分らない。

第十三話

石　器

或る時、マリンガ市の西に数十キロ離れてフロライという町に、元私の土地に働いていた家族を訪ねて行った時の事であった。

誰かから貰ったといって石の斧を見せた。

私も一九五〇年にローランジャの耕地でカフエーのテレーロ（乾燥場）を造るべく地均しをしていて地下一メートル位のところから一つ見つけた事があった。

湧き水の近くであったので石器時代の人が、この水を利用して住んでいたのであろうが、そうすると今私が利用するこの湧水は何万年も前からあった事になる。人の一生は短いが、自然は悠悠たるものであると今更の様に思った。

さて初めに戻って、見せられた石の斧であるが、此の人は石斧は石器人の作ったものではなく、これは雷さまが作ったもので、それを昔の人は見つけて使っていたのであると強行に言い張るのであった。コローノをしていても昔は地主であったといい、一寸したインテリーで早くから新聞などを良く見ていた人であった。人種は夫婦共にイタリヤ系の人であった。

その人に、石斧は雷さまの製作したものだというのはどうしてかと聞くと、雷が大木に落ちる時、この石斧を持って落ちてくるので木が張りさけるのだ、その証拠に雷の落

ちた木の下を掘れば見つかる事が多い、という。
それであなたは、雷の落ちた所をさがした事があるか、と聞くと、さがした事はないという。
こんな事で議論をして負かしてみても仕方がないので、いいかげんに相手して置いたのであるが、田舎を廻ったパードレ（神父）さんでも説教の時にお話して行ったのかも知れないが、私はおかしく思った。然し良く考えてみると、十分に子供へのオトギ話にはなりそうな考え方だと思った。

私の畠で見付けた石器の数は少ないが出てくるのはたいがい川辺りであった。生活には水が必要であるから自然に川辺りで暮す事になった事は誰にでも理解出来る事であるが、次に見つけたのは井戸を掘っている時に数メートル下から出てきたのであった。長い間に高い所の土が原始林の中でもこれだけ流されて来たものかと驚ろかされた事がある。此の時出て来たのは石のドンブリであった。
或る時、北海道から考古学者が来て、『これは世界的に珍らしい物だ。印度で一つ見た事があるが、これは深さが十二センチ？　と大変に深く掘ってある上に、外側に一本の線を浮き彫りにしてある。　浮かすという事は、その両側をこすり落してあるので大変労力がいるので大体は線をつけても浮き彫りにはしないものだから、これは大変に貴重品だ、登録をして置かないと、政府の機関から没収される事がある』と、登録の仕方迄教えて下さったが、ブラジル

では登録などしたら、なお早く没収されるかも知れないと、そのままにしてあったが、その後、ローランジヤの、我々の移民資料館に陳列されてあるのである。趣味の無い者には、猫に小判で、来館者にも興味を示す人は少ない様である。

この石斧や色々の石器（特に石斧が多いが）が、方々で見つかっているという事は、石器時代の人が居た証拠であろうか。石器が石器時代だけの製造で鉄器時代になったからといってそれまでに慣れていた道具が一度に捨てられる筈はないので、ブラジルの石器の製造年代は比較的新らしい時代の物ではないかと思う。

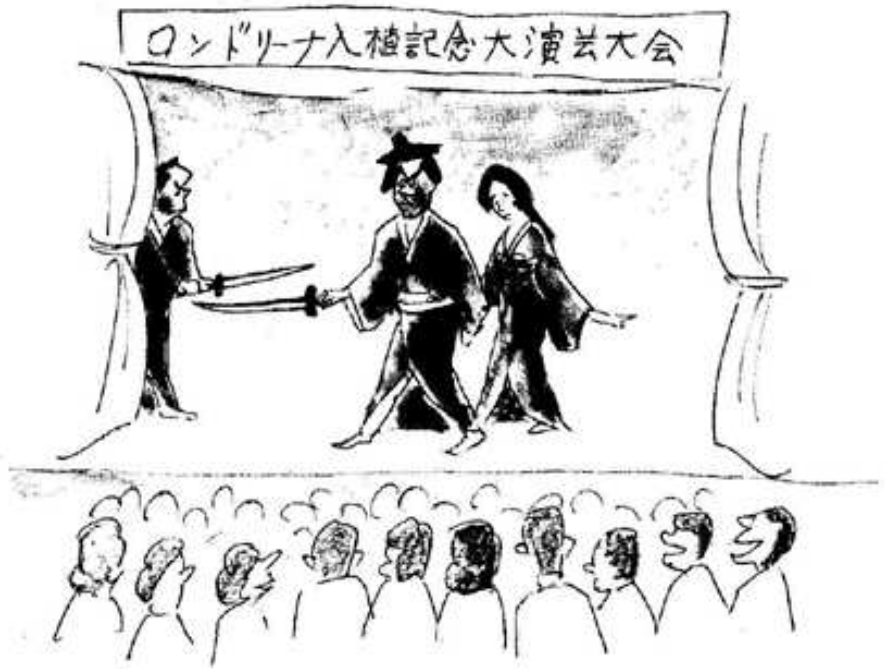
我が家に見つかったドンブリと、石の棒は、一緒にすると、マンジョーカをつぶしてでんぷん（ポルビオ）を取ったり、ミーリヨ（トウモロコシ）をついて、カンジッカ（トウモロコシの皮をむいて大わりにしたもの）を作ったり、又、現在なら炒ったカフユーを粉にするには最適であるから、近代まで家財道具として使われていたであろうと思われるのである。

そうした事からもブラジルの石器利用時代は案外に近代であったと思いたい。

そうしないと長い年代の割にインジオの人口が少ないと思われるのと、その割に石器が見つかっているのではないだろうか。

所詮素人の考えではどうしようもない事である。

第十四話　中央区の芸人



中央区の松原松太郎氏は若い時友だち二、三人でバイオリンを弾きながら、流しの歌手をしていたとの事であるが、入植してから歌った事が殆んどないので隣り近所の人に聞いてもまさかという返事だったが、私はファゼンダ・コアチの彼の家でその事を聞いたので、それでは一つとお願いすると、低音ながら上手な節まわしで歌われた事があった

から流しをしていた事は事実と信じている。
　又、バイオリンでは板倉芳雄氏と石川敏氏が居られた。板倉氏は岡山、石川氏は北海道の人であった。此の二人は共にバイオリンでは、かなり上手な人であった様である。
　何事も上手になると素人が考える様に簡単にはいかないものの様で、その為にバイオリンを弾かない二人の事を私が知っているのであった。
　近頃でもカラオケの時に、テープを忘れたとて歌わない人がいるが、それと似ている。
　中央区の入植十周年か十五周年頃に演芸会が催された時の事であるが、誰が持っていたのか、バイオリンを一丁見付けてきて、板倉、石川両氏が石川氏宅で調律していたのであるが、古い物で切れた糸の替りが無く、ビオロン（ギター）の糸を持って来て合わそうとするのであるが、仲々うまく合わないらしいのであった。
　素人の私は田舎の余興だから、いい加減で良かろうと思って見ていたのであったが、本人達は口で笛を吹き乍ら調律しょうとするのであるが、二、三日一生懸命に努力していたが、とうとう諦めて演芸会の出場は止めてしまったのであった。　私は惜しい事だと思ったが、音痴の私には所詮解らない事である。本人達には調子の狂った道具では弾けないのが当然であったろう。
　そこへいくと、楽器のいらない、有り合せの道具を利用して演芸会を賑わしてくれた素人芸人達がいた。
　梶原利助、遠国寿治、丹羽兄弟方で演じた、仮名手本忠

臣蔵の何段目か、猪と間違って撃たれた大野九郎兵衛か誰かが、胸から、口から血を吐いて、ぶっ倒れた時には、観衆一同びっくり仰天、とてもとても田舎芝居とは思われない名優振りであった。

喜劇では、丹羽氏の熱演がみんなを笑わせた。平林（ひらばやし）家へ届ける手紙を持った慌て者が彼で、字は読めず、「ひらばやし。」と忘れない様にと、口で唱えながら来たのに、どうかした拍子にうっかり忘れてしまい、通りがかりの人に尋ねると、初めの人は「たいらばやし。」と教え、次の人は「ひらりん。」と教えた。

そこで「たいらばやし。」か、「ひらりん。」か、と面白く、又心配そうに舞台上を走るのに三歩進んでは二歩戻り、三歩進んでは二歩戻りながら観衆を笑わせた名優？振りも、今では昔話としても出て来ない古い事になってしまったが、それもその筈だ。その子供らが、既に、六十、七十となっているのであるから仕方がない。

それにしても我々の親達は、文化の早く開けていた日本からブラジルの原始林の中に飛び込んで、良く挫折もせずに一杯のピンガに疲れをいやし、娯楽を考え出し、言葉の不自由な中で当国人に働いてもらって、苦難を乗り切る中で、よくも子弟の教育を忘れず、ロンドリーナ大学では何十％もの高率で大学卒業をさせている。小学生では二％位の生徒が大学になると二〇％をこしていくのである。

世の中には退化して滅亡して行った民族も多々あったらしいが、我々目本民族は当分発展していく民族の様である。

第十五話

虎バサミ

サンパウロ州から、パラナへのムダンサの途中サンパウロで二、三泊した。ホテルはルス駅の近くであったので、駅前にあった銃器店に入って買物をした。古いミシン等も売っていて相当しっかりした店構えの家であった。同行の大西氏は古い手ミシンを百ミルレイスで買われたが、私の両親はミシンは買わず、中型の虎バサミを二丁買った。ハサマル処が直径十五センチ位あったので、大きな犬位なら十分に捕えられると、言って持って来たのであったが、始め四、五回捕えたのは、二百グラム位の水鳥であった。サラクーラと言って、カン高く鳴き乍ら水の上を走って行く細く長い真赤な足をしたかわいい小鳥であった。

水の少ないコルゴであったから、川の中に虎バサミを仕掛けて置くと、その上を走った時にバネがはずれて、はさまるのであるが、足が長い為に、足がはさまってバタバタしていて、死んでいる事はなかったが細い足は折れていた。その為に却ってかわいそうで、二、三羽とつてやめてしまった。足の骨は折れても皮はちぎれずにバタバタと苦しんでいるのであった。

そこでサラクーラはだめだが、獣を捕えてやろうという事になって川辺りから少し登った処の獣道に仕かけておく事にしたら、或る日、山犬がかかつていた。

良く肥えていて三〇キロ位はあったと思う。この時も足の一本がはさまっているだけで、一生けんめいに逃げようとしているが、犬の知恵でははずせない。私は恐ろしいので早速父と兄に知らせると、どこだどこだと飛ぶ様に走って来て、たたいて殺してしまった。

動物をとつて食べる為に買って来た虎バサミであるから、これが当然なのであるが、私にはこれで良いのだと割り切った気持ちに仲々なれなかった。

夕飯に久し振りのうまい肉だと言ってみんなは食べていたが、私は足をハサマレて逃げられずに苦しんでいた姿を見ているので、うまいと思って食べることはできなかった。

そうこうしている内に中央区の四アルケールは忽ちに開拓されてしまって獣とは縁が無くなり、虎バサミの事は忘れてしまった。

それが、入植五年目の一九三九年からフレーザ区に拡張する事になって開拓が始まると再び虎バサミを思い出させられる事件が起きたのである。

デルーバしてカフエーをコーバに植付ける頃からタツー（アルマジロ）の繁殖が始まって、その巣が幾つもカフェザールの中に掘られていくのであった。相当に土を持ち上げているのは子供らも大きくなって来ているのであろう。巣の入口に耳をあてて聞くと、話し声か、いびきか、確かに音が聞こえるのである。カフエーのコーバが幾つも埋められていく腹いせも手伝ってくる。

そうした或る日、畠を歩いているタツーを見付けた。兄弟で追いつめると、体が半分位入る穴に顔を突込んだ。「それっ」と言って私がそのしっぽを両手で握って引張り出そうとしたのであるが、引き出せず、ついに彼は穴を掘りながら逃げ込んでしまった。

そこで虎バサミを思い出したのであった。早速中央区の兄の処迄取りに行って来て翌日の夕方穴の出日に仕掛けて置いて、その翌日、「仕上げは如何」と、出掛けて見ると、『ここは如何に』何がおこっていたでしょうか。

虎バサミは成功で、パチンと前足か、後足かを確かに挟んだのであったが、七転八倒したタツーは、その結果足首の処からちぎれた一つの足を残して逃げ帰って行ったのであった。

私は身ぶるいする思いであった。出血多量で死んではいないか、一本の足は片輪になっても生きていて欲しいと思い、それからは虎バサミとは縁を切り、自然の動物を殺生する事は殆んど止めてしまった。

第十六話
面白い給料の査定

私達の渡伯の時、同船者で北海道からの七、八家族がセッテ・バーラス植民地に土地を購入して入植する契約を半官半民の海外興業株式会社、通称「海興」と呼んでいた会社と結んで移住した。サントスに上陸すると、一般移民とは別れて、サントス市より汽車でジュキア駅へと南下

し、そこから舟でジュキヤ河を下り、リベイラ河の合流点からリベイラ河を上ってセッテ・バーラス町に着いた。ここは小さな町で、その頃はムニシピオにもなっていなかった。或いは海輿がセッテ・バーラス植民地を拓いた時に出来た町であったのかも知れない。そこから十二キロの地点にキロンボというビーラ（小さな村）とも言えない人家が十軒程あって二、三軒のベンダ（売店）のある処があり、そこから、右廻りでも、左廻りに行っても十二キロの地点で、その道が行き会う所に豊田という一軒のボテコ（売店）があり、その前に海輿の移民収容所があった。

此の移民収容所がマンパウロのグルッポに使われ、今では立て替えられてレンガ建ての学校になっていて電気も入っている。

此の辺に土地を買った人は、此の収容所に一たん落ち着いて、自分の土地に小屋を建てて移って行く事になっていた。

同船者のうち二、三家族はここ迄来ない途中の既開拓地に権利金を払ってとどまり、私達数家族は、会社の事務所で植民地の地図の上にいい加減に画かれた一本の線を鉄道の予定線とだまされて、此の収容所迄移動して来たのであったが、其の時一足早く、ブラジルの他の地方から移転して来た一、二家族の人がいて、二、三日後にムダンサ（引っ越し）して行った。

私たちは、更にここから四、五キロ奥のロッテを購入したのであった。

八月からデルバ・マット（原始林の伐採）、山焼き、蒔付けと忙がしかったが正月を過ぎると少し暇が出来てきた。

それで正月の半ば過ぎの頃、同船者の石川氏兄弟が、三、四人で出稼ぎしたいので、私のロッテの角に、小屋を建てさせて欲しいと頼みに来られた。それで、どこで働くのですかと尋ねると、このすぐ奥に道路工事が始まっていて、人夫を集めているので、アロース（稲）の収穫が始まるまで二、三ケ月小使いかせぎをするとの事であった。

私たちの家の横の方には空地が十分あったので使ってもらう事を承知すると、パルミット材の拝み小屋を立てて、パルミットの葉で屋根を葺き、二、三日後には道路工夫として働きに出ていった。そこで面白い事がおこつた。石川氏の長男は現在九十余才で当ロンドリーナ市に健在であるが背の高い人では無く一米五十七、八位ではなかろうか、次男は清君といって一米七十五位、三男の泉君は、一米六五を少し越える位であったと思う。

そこで面白い事というのは、給料日になって起こつたのであった。

その一人一人の給料が、身長によって九ミル、八ミル五〇〇、八ミル、七ミル五〇〇と四段階位で支払われたのである。

石川さん兄弟が来られて十日程した頃から私の兄と隣りの大西氏も加わっていた。

私の兄は学生上りで力はないのに背丈は一米七〇はあっ

たであろう、それで八ミル五〇〇か九ミル組に入ったので、隣りの大西氏が、一寸立腹気味だった。大西氏は農家育ちの上剣道初段で腕力の強い人であったが、残念に身長が低いので七ミル五〇〇と査定されたのである。情ない気持ちは十分に察せられるのではあるが、査定する側が言薬の通じない外人共の事でどうしようもなかったのである。

それにしても、身長によって賃銀を決めるとは、何とも面白い事をしたものである。六十年過ぎた今日でも、あの時のパガメント（勘定）の日の光景を時々思い出すのである。

第十七話

名馬盗まる

入植して四、五年した頃、同船者の大西氏がキレイな大きなカヴァーロ（馬）を買い、シャレータ（人を乗せる馬車）を引かせたり乗馬で用足しなどしていた。良く手入れをするので美しさは評判であった。

部落にまだカローサ（荷馬車）の一台も入っていない時代であるから尚更であった。

ところが或る日、その馬が盗まれたのだから大変である。親子で近くを捜し廻るがなかなか見付からない。

その内にロンドリーナの町に出て、誰か馬を見かけた者

はいないかと尋ねて歩いていたところが、ＴＡＸＩのアルゲールをしていた丹氏が、同僚の話として、「あなたの馬に似た馬が、ＢＥＬＡ　ＶＩＳＴＡ　ＤＯ　ＰＡＲＡＩＳＯの手前を歩いていた。」　とのニュースをくれたのであった。

　此のニュース、本当であるか、ただかつがれたのかわからないのだが、大西氏は是非捜しに行って見たいと思った。四十余キロもある遠い処でもあり、お互に言葉も充分できないので同伴者が欲しい様子であったので結局、翌日私と隣りの石川さんが一緒に行く事になった。

　翌朝、丹氏のタクシーの迎えを受けて、石川氏と私と大西さんの長男の繁雄君の三人で、出発した。

　ベーラ・ビスタの手前、町のきわで、「此の辺と言う事です。」　と言われて車から降ろされた。

　さて捜すといっても見当の付け様もなかったが、それでも、そこらの地主を尋ねて見なければならないだろうからタクシーには帰って貰う事にして、捜しながら帰ろうという事になる。

　まだ朝は明けたばかりであった。

　先ず、フアゼンダ・ブラジレーラ　（ブラジレーラ耕地）の支配人宅を訪ねる。

「うちのパスト　（牧場）　には他人の離れ馬は今のところ一匹もいない」　と言われる。パストは家のすぐ横の広いもので沢山の牛や馬がいるが支配人の言葉を疑うわけにもいかず、その次という事になるのだが　「さあ大変」　である。

どの耕地の入口を入っても一キロから一キロ半はあり、エストラーダに出て五、六百メートルか、一キロも来ないうちに次の耕地の入口になる。一軒尋ねるのに一時間位はかかる事になる。べんとうも食べてしまって午後の四時頃であった。一台のカミニョンがロンドリーナに向って来た。私たちを見て止まり、「ロンドリーナに行くなら乗せてやろう」と親切な言葉であった。私はへとへとに疲れていたし、何の手ごたえも無いのでよっぽど帰りたかったが、繁雄君が頑張っているので、石川氏も遠慮して、カミニョンを断ってしまった。カミニョンは快音を残して行ってしまうし、道はまだ半分も来ていないのでとても今日中に家に帰り着く事などは想像も出来ない。

それから二、三軒訪ねているうちに日暮れになって来た。石川氏は私より十五、六才も年上のおじさんであるから、頼りにしていたが、

「さあ、此の辺で野宿の準備をしないと暗くなっては大変だ。丁度ミーリヨ（トウモロコシ）も実が入っているから夕飯がわりに焼いて食べよう。明朝このカリヤドール（作道）を下っていって、ミーリヨ代を払えばよかろう。」

というので、レーニヤ（薪）を集めて火をおこしてミーリヨを焼きだしたら、下の方から地主の息子たちが二、三人で

「何をしているのか」

と心配してやって来た。石川さんが事情を述べて許しを乞い、ミーリヨ代は明朝払いに行くつもりでいたと話すと、

「ミーリョ代はいらない、その様な事情ならいくらでも食べてよろしい」と寛大な態度であった。放れ馬は来ていないから明朝は、下へおりなくていい。火の仕末だけして帰るように、との事であった。

それで安心してちょうどそこに倒れていたヒゲーラの陰にミーリョの下葉の枯れたものを集めてゴロ寝で一夜を明かした。泊る用意は誰もしてきていなかったのである。エストラーダから近い処にミーナ（湧き水）のあるロッテであった。

翌日又、カリヤドールを一本一本入って捜したが結局徒労に終って、帰宅したのは夕方であった。その日の食料は二、三本の焼いたミーリョだけであったから空腹でやっと家にタドリ着いたのであった。馬はとうとう見つからないままであった。

此の項を書き乍ら、全体として何キロ位歩いたものかと思うのである。

私は十六才の頃九十六キロ歩いた経験があり、それが一生の記録かと思っていたが、その記録を破る程のキロ数を歩いていた事になるらしいので今改めて、そんな事を考えるのである。

第十八話　ツン張り棒

一九五〇年に私はフレーザ植民地から、ローランジヤに移転した。旭植民地に居られた高野功氏のお世話で此処の土地が入手出来たからである。

高野氏は青年時代は野球で、後には産業組合のお世話をされていて、よく知られている人であった。

その頃からパラナ州有地の払い下げの話が私たちの耳に

入って来る様になった。
アプカラーナに居られた宮村氏の、苦労の多かった宮村植民地の造成・売り出しもその頃に始まったものではなかったかと思われる。
私のコローノ達までが、払い下げの手続きと言って出かける様になった。一ヘクタールに付き、一ミルレースのセーロ（印紙）代だけで、一人四〇ヘクタール迄申請出来る。二人の男（成年）がいれば八〇ヘクタールの申請が出来るわけだ。手数料は払い下げになった後に払えば良いという事でネコもシャクシも申し込んだのであった。
私は根性をまげて、此の手続は誰か資本家が人の名義を利用しているのだろうと考えてその時手続きはしなかった。
然しそれから間も無く親戚が、自分の町の元プレフェイト（市長）がクリチーバに移っていて、今手続きすれば可能性は高いと言うから、早く出て来いというので四、五人が飛行機で出かけた。テコテコ（セスナ機）をアルーガしたのか、リンニャの便があったのか記憶はあいまい。
ただ忘れられないのはセーラ・デ・カジアードを過ぎた地点からピニエーロ（パラナ松）の林が続いて、はとんどクリチーバ迄、枝から枝がつながっているかと思う程広範囲に松林があったことである。
さてクリチーバに着くと、早速、元プレフエイト氏を訪ね、一緒に役所へ行き、土地払い下げの手続きをした。
やはり、一ヘクタールに付一ミルレースをセーロ（収入

印紙）で払えばよかった。

一応の手続きが終って、私は、こんな事で一人に四十ヘクタールの土地がもらえるものかなあと不審に思っていると一行の中から、「どこかにツン張り棒をしておかなぁあかんな。」という意見が出て、「そりやそうだ。」と、結局今日のところは、元プレフェイトのあの人にお願いしておこう。と、いう事になって、幾許かの金を集めて置いてきた。

それきりで私達の土地払い下げは諦めてしまった。その後何の音沙汰も無かったのである。

結局はツン張り棒が細くて用を足さず、補強をしないものだから朽ちて折れてしまったのであった。私はそれで良かったと思っている。

然し世の中にはねばり強い人がいる。アプカラーナの宮崎義雄氏など、どれだけツン張り棒の補強をされたのか、とうとう相当の面積を払い下げされたという事であった。払い下げが決まると次には測量技師を連れていって、自分の土地を測らなければならない。ロッテが決ったら何十kmと道の無い所へ何とかして、労働者を連れて行って規定の面積を開拓する義務がある。

その様な山奥に行って暮してくれる様な者は気性の荒い者でないといないので、とても私らの様な意気地無しでは出来ないと思った。それを宮崎義雄君はやり遂げたのであった。

宮崎君の話では陸路が無いので大河から地図を頼りに支

流から支流へと何日かかけて上って行ったのだそうである。
以前私のカマラーダが一時ローランジヤ市のマッシイ氏の開拓地へ仕事に行った時の話に、彼は払い下げしたロッテに番人として勤めたのであるが、悪い者が川からあがって来る事があるから、自分のロッテに入って来たら打ち殺しても良いとカラビーナ（鉄砲）を渡されていたという。
川の番をしていたら時々人の死んだのが流れて来たとも言っていた。強いしっかりとしたツン張り棒をして土地を入手しても、本当に自分の物にする迄には大変な苦労があったのである。
世の中ぬれ手に粟という事はないのである。

第十九話

生兵法は怪我のもと

人間貧しい時代とか希望に燃えて張切っている時は割合に病気にならないものの様である。
ロンドリーナへの入植時代の一九三〇年代など、風邪を引けば、ピンガを一杯、飲めない者までちょつと飲んで温くして寝れば翌日は治っているという工合で、クスリを飲むとしてもアスピリン一粒飲む位のものであった。

下痢も大体なら腹を焼塩で温めておれば治り、余程激しいものでも又アメーバでも「エメチーナ」を一、二本注射すれば治ったものであった。

病気よりもという事も無いが、貧しい故に米を倹約して、フバー（トウモロコシの粉）で、ポレンタを作って常食にして胃腸を悪くしたという家族があった。サンパウロ州のファゼンダ生活時代に、ポレンタで健康を害ねたと言われたが、その頃の私たちはポレンタという食物を知らなかった。

後日その家族の話が理解出来たのは、ポレンタは「フバー」（トウモロコシの粉）が原料でイタリヤ人がよく作っていたが、大体ポレンタを作る家には婆ちやんが居て、ゆつくりと時間をかけて作るのである。それを移民したばかりの忙がしい時代の日本人が作るから、フバーが良く煮えていなくて、それを食べたので胃腸を痛めたのであろうと思う。

私の知っている家では上の二人は体格はいいが、普通の仕事は出来ないとの事であったし、下の二人の子供らは細い弱そうな体格であった。何年も米の飯を食べなかったと言われたので、ファゼンダ生活とはかわいそうな事もあったのだと知った。

胃腸をこわせば、下痢をする。長引くと、「それは、アメーバだ」とか、「赤痢だ。」とか言って、「エメチーナ」という注射液を皮下に打ってもらつたものである。

幸いにコアチーのフアゼンダに林という家族が契約をしていて、この主人が、良く注射を打ってくれた。

私たちは下痢で「エメチーナ」を打ってもらったのではなく、今思うと腸チフスの予防注射ではなかったかと思うが、林氏の家のサーラで打ってもらった記憶がある。

私たちの借りたランショは、物置き小屋であるから壁のパルミットは二米程であるがフアゼンダの契約者の家は三米の板の壁であるから、立ちの高い家だと思った記憶がある。

中央区の人達、ファゼンダ・コアチーの契約者たち、殆んどの人が、此の林氏に注射ではお世話になっている事と思うのだが、此の林氏が、二、三年後にカフエーザール植民地にムダンサして行かれ、その後間も無く亡くなられてしまった。

元気な林氏には又頑丈なタイプの弟さんが居られて仕事の上手な、人柄も立派な人であった。

その元気な林氏も下痢を起こして、飲みぐすりを服用したらしいが、下痢が簡単に止まらない。この様な状態の時には「エメチーナ」を打つと治る人を見ているので、自分も注射を打った方が良いかも知れないと考えた処までは良かったのであるが、その時『注射を打つのは、早く利くから打つので飲んでも同じ効果のものだ』と、思って、口から飲んだとのことであった。

さあ大変。「エメチーナ」は、注射すると良薬であるが、

口から飲むと、相当に強い毒性があるらしく何程もなく、あの頑丈な体の林氏が亡くなられてしまったのである。

林氏を知る者は皆、びっくり仰天したのであった。

温厚で、忙しいフアゼンダ生活の中でも良く他人のお世話をして下さった林氏が亡くなられたのは、六十才にはまだ相当間がある、五十五才になられたかどうかと思う年であった。弟さんは居られたが、自分の子供はまだ小さかったかと思う。一家に取っては大事な大黒柱が、突然に亡くなったので、奥さんも其後苦労された事であろう。

兎に角、「生兵法は怪我のもと」　クスリばかりでなく、人生の諸間題も良く考えて大きな悔を　残さない様に注意をして行きたいものである。

第二十話　鉄砲では魚はとれん

弟二人とカマラーダの三人で或る日トレスボツカ川にペスカ（魚とり）に行った時の話である。

その頃私たちはフレーザ植民地にいたのだが、そこから、一区植民地の真田さん、広岡さんの近くを通って行ったので、今の東洋センイ辺から少し下のあたりであったろうと思う。

早朝べんとうと竿をかついで意気揚々と出かけ、川につくと早やアルモッサ（昼食）の時間になっていたが、先ず一尾釣りあげてからと、・急いで竿を下げて見たのであるが、相手の魚もドミンゴ（日曜）で、どこかへ遊びに出かけたのか、さっぱり喰い付いてこないのであった。

そこで、あせっても駄目だと、べんとうを食べる事にした。いそいでべんとうを食べて、又、釣りにかかったのであるが、相変らずさっぱり喰いつかないのである。

「こんな事なら家の横のリモエイロの小川の方が良かった。」

と、言いながら、今度は残してあった、べんとうをゆっくりと食べて帰る事にして、初めて来た、良く釣れるとの評判で期待していたトレスボツカの河の流れを、恨めしく眺めながら、さて帰ろうとすると、今迄とうとうと流れていた川の水が、どんどんと減っていくのであった。

「アリヤツ、これはどうした事だ。」

と、言って見ているうちに川の流れはなくなって所々に水溜りが出来たのであった。そうなって、やっと上の発電所で水をセキ止めた事に気がついたのである。

べんとうがらを片付けて川に下りて、水溜りをのぞいて見ると、逃げおくれた一キロ、二キロのみごとな魚が、手掴み出来そうな状態で泳いでいるのであった。

「しめた！」とばかりに、三人で、手づかみにかかったが、魚がすべる上に案外元気なので仲々つかめない。掴み落したのが次の水溜りへ玉石の上をピンピンはねながら行くのだが、玉石の足場が悪くて追い付けない始末で、情けない

事、此の上ない。相当の時間をかけて努力してみたが、手づかみは諦めざるを得ない事になった。

が、其の時になって思い出したのが、鉄砲を持参していた事であった。

「オイ、鉄砲でうってみたら取れるのではないか。」

と一人が、取りに上って持って来た。水面下十センチから十五センチ位にいる魚に向けて一メートル位の処から撃つのであるから、今度はとれると、一人はねらう。二人は、後の事を考えて見守る。

「ズドーン」と一発撃ったが、魚は「パツ」と横に逃げただけで、浮いて来ないのであった。

再び魚を浅い処へ追いつめて、撃って見るが、散弾では、水中の魚は獲れないのであった。

「投網があれば」とは思いながら、手づかみ出来そうな状態なのに、手ぶらで帰る情けなさは言葉に表わし様もない有様であった。

さて、さんざん魚に笑われ、踊らされながら奮闘努力した結果腹をすかした帰り道のつらさは一生忘れられないものだった、と弟たちは思い出を話す度に言う。道べりのマモンの色づいたのは残さず食べてきたという。

はたで見ていた人がいればさぞ面白かった事であろう。

最近になってアサイの嶋田巧氏に聞いたのだが、魚の手づかみは仲々出来るものではないが、手に靴下をはめると割合簡単につかめるものだとの事である。

第二十一話
バタタの苗

北パラナ・国際植民地に第一号として移って来た荒氏が、移って来て気がついたのは、ムダンサ（引越）に気が取られてバタタ（ジャガイモ）の苗を忘れて来た事であった。

フアゼンダ・コアチーにフオルマ・カフエー（カフユ育成契約）の契約をし、ここから通ってボツボツと自分の土地を開く計画を立てていた。

このフアゼンダは前年度即ち三十年に開拓されていたが、カマラーダを集めて経営していてバタタの苗の一本も無かったとのことである。

そこで一日荒氏は二十余キロ離れたジャタイ迄バタタの苗を捜しに出たのであった。オニブスもなければ、カローサもない時代でトボトボと歩いて出たのであった。途中拓いている人は誰もなく全く道の両側はうつそうたる原始林であって気持の良いものではない。人一人会うものでもなし、たまたま前方を横切るのは山猫か、時々は猿の群れが木の枝から枝を伝って移動して行く位の事であるが、オンサ（ひょう）でも出てきたらとの不安も無いわけでもない淋しい旅であった筈である。

やっとの思いでチバジー河にたどり着きバルサ（渡し

舟）に渡してもらってジャタイに着いたのであった。この町は淋しい人家の少ない町ではあったが、歴史は古い町であって尋ねて歩くと希望のバタタの苗が手に入って喜んで再び二十余キロの道をその苗を背にしょって帰って来たのであった。

帰ってその苗を植えると翌年には二月頃から白い、おいしいバタタが沢山出来て、楽しまれたのであった。

間題はすぐその後に起きた。三十二年になると、コアチのフアゼンダにも日本人が数家族入って来る事になり、又自分の土地に入植する者も出てきた。それが国際植民地で諸外国人も移って来たので其の中には荒氏と同じ様にバタタの苗を忘れてくる者があり、荒氏の所へ苗を分けてほしいと尋ねてくる者がいて、荒氏は前年の苦労があるので、「あなた方は二〇キロ私の様に歩かなくとも良いのだから、少し払ってくれても良かろう。」

と僅かの代金を貰ったのである。

当然の事の様であるが、その翌年には有り余るバタタの苗で荒氏はバタタのシツポー（つる）代を取ったと不満が悪口になって出て荒氏の信用を少しキズつけた様である。

当の荒氏も気になったらしく私の家にきて不満を洩らしていた事があった。

僅かの代金をもらつて悪口を言われるより只であげて感謝される方がりこうだなと、脇できいていて思った。

又、二十キロも人家の無いマットの中の道を淋しい思いをして二日係りで取りに行ってきた人の苦労を感じない世

間の人も勝手なものだが、そうした世間というものを知らなければならない。

若し荒氏が、自分の苦労を犠牲にして無料で分けていたら、「荒さんは二〇キロのジヤタイ迄歩いていって求めて来たものだそうだが、私達は此処で只で分けて頂いた。」と、感謝され、尊敬された事であろう。

“苦労して得たものを人に分つ〃心使いというものが社会では必要なようである。

数年前の事であるが或る地方の人から、「私の果樹園に或るくだもののオス木が見つかつて皆様が欲しがっているが、今迄の私の研究を見下げていた連中なので、ひとつ思い切り儲けてやりたいが、どうだろうか。」という間い合せがきたので、早速昔のロンドリーナのバタタのつるの事があるから、只であげて喜ばせなさい。どうせ来年になれば、皆さんの所で増えて無価値のようになるものだからと、注意してあげると、『指導の通りにすると、皆さんに大変喜ばれて名誉を回復出来た』と喜んだ返事が来て安心したことがあった。

僅かの犠牲が安心となって返ってくる。若し大きな大きな犠牲を払ったら、もっと大きな安心となって返ってくる筈なのに、人間は容易に他人の為に犠牲は払えないものである。

検討すべき問題である。

第二十二話　俄か医者になる。

それは四十年程前の事であるが、クレーバ・タペジヤーラに土地を買う時、始めてテコテコ（セスナ）で視察に行った。コレトール（世話人）が、ノロエステ銀行の支店長であったので信用して行った。勿論近くに飛行場も無し又、道もあいていないので飛行機の上から、見せてもらつて、買ったのであったが、危い話である。

私の場合幸い世話する人が、信用を看板にしている人で

あったので、良くロッテを覚えてくれていて、此のミーナ（水源地）から下に向って左側が今売られているロッテだ。ミーナからカブセーロ（分水領）に向って百アルケール位にパルミット（椰子の一種）が相当にあってカフエーが育つだろう、と説明してくれたが、後日道があいてから、行って見で間違っていないことがわかった。

何万アルケールのマット（森）の上空から、よくも間違わなかったものと思うが、その時の事を振り返って見ると、昔、マット・グロッソやゴヤス州の土地が盛んに売り出された頃、ただ売りさえすれば良いというコレトール相手に土地を買い、後日行って見たら全然違うロッテであったという話を聞いた事が度々あったが、土地というものは大事なものだから、是非地上を行って確めるべきものだと思う。飛行機の上からではだまされるのが当り前の様な気がする。

さてそうして買った土地を開拓していた或る日、私と隣りのファゼンダのパトロンと二人で、私のジープで出かけると、待っていたように、カマラーダが今、足を折ったといって使いの者が飛んで来た。コロニヤへ行って見ると、カーマ（ベット）の上に、二メートルもある様な黒人がうなつて横になっているのであった。フツテ・ボールの最中にすねを折ったというのであった。折れた時には「ボキーン。」と、音がしたそうである。

瞬間に、私はうちのカマラーダでなくて良かったと思ったが、隣の主人は困ったと思った事であろう。「沼田、これ

はどうしたら良いと思うか。」と尋ねてきた。
私は、
「私達が勝手な手当てをして、若し悪い結果になったら責任問題になるが、今日の場合、田舎の医者でも百キロも行かねばならず、連れて行くのには、患者が耐えられる様な道ではない。仕方が無いから、私が治療してやろう。若し、発熱でもして悪い様な事になれば、誰かに、電話のある所まで出て、連絡させる事にし、その時は医者を連れてくれば良いだろう。」
と、いうと、
「お前出来るか。」
と言う。私は、二、三度見た事があるので、
「何とかなるだろう。熱の出ないうちに手伝え」
と、私は、俄かドットトール（ドクター）となった。
ペニシリン反応が出た事はないというので、先ずペニシリンを一本打って置いて、足を良く洗わせ、片方ではすねの長さに合せてリッパを四、五本、うすく削って清潔なパンノで巻かせて、いよいよ四、五人掛りで、大男をおさえて足を引張り、折れていない方の足に合せて向きを見て、後にリッパを当てがってキチッと包帯を巻いて、プロントとなる。足を引張る時には相当に痛かったらしいが、これをしないと曲ってつくので仕方がない。
そうして、
「三日位はペニシリンを一本ずつ打って、それでよかろう。ひどい熱が出たら、電話で知らせ。」

と、言い置いて帰って来たのであったが、一週間しても、連絡が来ないので、悪い事はなかったのだろう、とその中に忘れてしまっていた。

二、三ケ月して私がフアゼンダへ行くと、先日の御礼だとフランゴ（若鶏）を一羽持って本人が私の宿舎までお礼に来た。セニョール（且那）は、比の辺の医者より上手だ、足も真直ぐに良く治って三週間目から働いている、と喜んでいた。

私も面目を施こしたわけだが、冷静に考えると冷汗ものではある。

それにしてもあの頃の一時期はペニシリーナの流行で、随分使用したものだったが、私の処では一人も、反応を起す者がいなかったのは、幸いであった。

町から遠く離れた山奥の開拓には何かと思わぬ事がおきて心配をさせられるものである。

第二十三話

資産凍結令

一九三九年に入ると、日本語の教育も益々難かしくなり、青年会の括動でも次第にきゆうくつになってくるのであった。二、三十人も集まって何かをしようという事が次第に厳しく取締われる事になってきたので、事件をおこさない為に注意する様になっていくのであった。

三十九年初頭に行われた青年弁論大会など、現在ローランジヤにある移民資料館の隣りのロッテに高野功氏が五アルケール持って居られたが、その住宅が畠の中間に建っていて、家から川に向って百メートル以上も下った処に、その低い畠でとれたセレアエス（穀類）を保存する為に作ったパルミットのパイオーラ（ヤシの小屋）で行なわれたのであった。六mに十m位のパイオーラには、三分の一程の場所にフェジョンや、アロース等が置いてある狭い所で催されたのであった。集まったのは出場者、審査員、聴衆とで三十名位であった。カデーラ（椅子）が無く板のバンコであった。

ボツボツと高野氏の住宅に集まり、時間が来たと言う事で、住宅から、そのパイオーラへ移動するにも、一度に出ては人目につくとて、四、五名ずつボツボツと、移ったのであった。これが戦争の始まる二年前の二月の事であるから、戦前戦後相当長い期間不自由させられたのであるが、

過ぎてしまうと忘れるものである。

旅行の自由も制限されて、サルバコンヅット（旅行証明書）が強制されたのは何時頃からであったのか忘れてしまった。

その内に資産凍結令なるものが発令されたのであるが、此の法令の為にひどい目に会ったと言う人は、既に成功していて相当の大事業をして居た人たちで官吏の手に経営権が移って、大変損害を受けたという話は聞いたが、我々小地主には何の影響もなかった。むしろ私は此の法令の為に小地主は守られたのではないかと考えている。

不動産は凍結されたので売却してはならないが、買うのは買っても良いというので此の法令を恨む必要は無かった。

ところが、此の法令前、大東亜戦争が初まるとすぐ土地を売った人がいて、此の法令が出ると、

「だから私が、戦争が始まったのだから、早く土地を売って日本帰りの準備をしなさいと注意をしてあげたでしょう、今となっては手おくれになりました。」

と見舞を言ってくれる人が居た。

然し私の母は、大勢の家族を抱えて土地を離して帰国を待つ様な事は危いからしてはいかん、土地は売れなくてよろしい、と、凍結令を恨む気持はなかった。

ところが世の中には色々な考えを持つ人が居るものだ。

或る一日、ローランジヤのカルトーリオ（登記役場）に立ち寄ると、日本人が面白い事を頼みに来たと話してく

れた事がある。

『凍結令で土地が売れないが、どうしても売りたいので買手と相方で考えついた事であるが、法律上一番長いプラーゾ（期限）で貸すので、そのコントラットを作って欲しい』

と、言って来て、国際条約のような九十九年の貸借契約書を作り、その間のアレンダ貸（借地料）として地代を払い、九十九年の内に凍結令が解除されたら、地権を譲渡するという事にして無理矢理土地を手離した日本人がいたとの話をしてくれた。

凍結令以前に売って帰国準備をされた人は帰国を待っている間にボツボツと使い込んでしまい、その結果が、勝ち組に迷わされる事になって、自分の代を棒に振ってしまった。

九十九年の契約売買をした人は誰か分らないので、その消息も判らないが帰国準備の為に売ったのなら成功ではなかった事と思う。

資産凍結令、この法令の為、一般のコロニヤでは守られた人が多く、恨んでいる人は少ないと思う。

第二十四話　栄枯盛衰

或る日シネマを見に行くと、始まりに、本島自転車商会の宣伝映画が写された。自転車ばかりでなく、冷蔵庫、フォゴン（ガスレンジ）その他の家庭用品が広い店一杯に並べられて居り、尚、倉庫には沢山のエストッケ（在庫）が積まれており、更に次々と入荷の様子が映されて誠に盛大な事業の様子であった。

住宅の方も映されたが、全くの成功者の観があった。

その本島氏がセルジッペで店を開けた時は小さな、自転車の修繕屋であった。私なども時々古自転車の修繕をしてもらったものである。

その本島商店が、その後、他人に売り渡されてしまった。噂では事業の失敗らしい。あの店が閉められて淋しい思いをしたのは私だけではなかろうと思う。

斉木氏の運動具の修繕も懐かしい店であった。若い者の溜り場でもあった。西岡氏のカーザ・アズルなども十年そこそこで閉店してしまった。

その向いの角に松田旅館があったが、この老夫婦は勝ち組にだまされてサンパウロに出て行ったが、勝ち組では帰国かなわず、自費で帰ったらしいが、淋しい晩年を送ったらしい。

セルジツペもその次のクワルテロンになると木井さんが居られる。この店は一九三五、六年頃来て父親が洋服屋をしておられた。父親が亡くなられて後にバザールに替えて今日に至っている。その隣りあたりに、鷹嘴さんの魚屋があった。又その隣りか、同じ店か荒木食堂があった。此の店の前身でないかと思うが福地という雑貨店があった事もある。此の人或る年雑貨商をやめて、そこでセレアエスの仲買いを始めた。ところが一、二年するとフェジョンの値上りで、しこたま儲けたのであった。「やっと商売の要領が分かつて来た。」と言って大変喜んでおられたが、次のサフラになって、買うと下がる、又買うと下がる、そのうち

に値が出るかと期待していると、反対に暴落して、前年の利益を吐き出しても、更に大きな損害をこうむったらしく、再び第一線には出て来なかった。他所で事業をされたか、どうかは分らない。その向いで、レストランテ・東京の屋号で食堂を出した人も居たが、長く続かなかった。宮崎氏の薬局の所で雑貨商を開いた吉原兄弟の店も長くは持たなかった。

木井氏の向い当りに、カミニョン（トラック）がやっと入るコレドールの奥で大きなベビーダ（飲料水や酒類）を扱った人がいた。川久と言われたと思う。かなり長い間経営されていたが、後日アラポンガ方面に移転されて行かれた様であった。

宮崎氏のプレージオ（建物）から道をはさんだ角に指物師の大西氏がおられたが、此の人も長く続かずいなくなった。その向い角に床の高い家で花田という、床屋さんがいたが、七、八年程で、どこかへ移転されてしまった。ずうと上に上ってパペラリヤ(文房具店)の吉川氏は相当長く繁昌していたが、老後を楽しく暮らす人生計画に従って整理して落ち着いた生活を送って居られる。下にさがると大場さんのバザールがある。五十年組かも知れない。

緒方氏の理髪店も六十年に近い店となった。その近所にパペラリーヤの栗原商店があった。大きな紙の卸小売をされていたが、子供さんは商売は変えても、堅実に頑張って居られるので、たのもしい。

人生は一度限りのものであるから、乗るかそるかやって

見よと云う人が居るが、後日起き上れない程の失敗をしては大変だから、やはり堅実な経営で、後戻りをしない様に気を付けたいものである。

「事を図るは人に在り
事を成すは天に在り」

と言う言葉があるが、事業の永続は難かしいものの様だ。

第二十五話
先輩の苦労

それは、或る夏の朝の事であった。ここボリビヤ国のサンタ・クルース市はボリビヤ第二の都市で、その周囲に沖縄県人を主に日本移民が相当入っているのであった。サントスに上陸して、サンパウロ、バウルー、カンポ・グランデ、コルンバーと、あのガタガタ汽車にゆられゆられて移住して行ったのである。此のサンタ・クルース市の駅からブラジル国境に向って汽車が出ると、その汽車をうらめしそうに見送った、一人の日系青年が、ポツポツと、その線路を伝って歩き始めたのであった。ブラジルへ渡り、更にパラグワイへと落ち着く場所を求めての視察旅行であった

が、少々持参のボリビヤ貨をスラれたことを、切符を買いに窓日へ行って気が付いたので、ブラジルの金で売ってくれと頼むがだめで、そのうちに汽車は出て行ってしまったのであった。仕方なく三百kmコルンバ迄歩く決心をしたのであった。

夜も昼も歩き続け、疲れると線路脇の木陰に休み、又歩く。こうして、処々でカマラーダ（日雇い）をしながら、落ち着く場所を探して、サンパウロを振り出しに北はベレンからトメ・アスーといわゆるアマゾン地方から、南はパラナ、サンタ・カタリーナ、リオ・グランデ州、外国はボリビヤ、パラグアイと見て廻って最後にサンタ・カタリーナに落ち着く事になるのであるが、若い独身青年の安住の地を求めての一万km余の視察行脚を何と説明して良いのか、私には解らないが、やはりこれも先輩移民の苦労の一つとして記録して置きたい。

又、戦前バストス植民地に縁があり乍ら、カナンの地を求めてアルゼンチンへ密航して移住した青年もいた。何年か隠れて働いた後永住権をもらうという巧策をしたらしい。

又、ペルーへ鉄道工夫として出稼ぎに来ていた連中の中から、ブラジルにあこがれて、万年雪のアンデス山脈を徒歩で越境してきた人も相当にいると聞く。途中で倒れた人、土着民の中に落ち着いた人、希望のブラジル迄到着して、安定した生活にはいった人もいるだろう。

誰か、そういうことを調査して残して頂きたいものと願うのは私一人ではなかろうと思う。

鹿児島県人の松下氏は一九〇〇年バネ仕掛けのオモチヤを日本から仕入れて行商しながら海岸線を北上してマナウスに到着。後更に川舟で数百km上流のペルー領迄行き、越境をとがめられて二、三日留置所に留められるが善意が認められて無事帰って来たとの事であるが、愉快な話である。此の時もそこにアンデス越えした日本人が住みついていて世話をしてくれたとの事。

百年近い昔の話であるが、我々の先輩には元気の良い者がいたものだと心を新たにするもの　これらの先輩諸氏がジヤポネース・ガランチード（日本人は確実）の信用を残してくれていたので、後続移民が、遠い国に不安一杯で渡りながら、気楽に住み着く事が出来た事を忘れてはならないと思う。

第二十六話　時代に合わす

当然とか、常識とかと、言ってみても、或る時期が過ぎると、合わなくなっているものがある。

我々の毎日食べる御飯でも、釜に五センチもある様な厚い「ふた」をして炊いて、尚泡をふき出さなければ美味しい御飯にはならないと思われていたものが、その内にふちに返りを付けて、吹いてきた水が戻る様にした鍋が出来て来たが、それ程一般に普及しない内にデンキ釜の普及となって、泡を一つも吹かせない事になったが、御飯がまずくなったという事は聞かない。

然しこれはデンキ釜の発明の為で別だと言うなら次の話はどうだろう。

以前は裁縫学校なるものがあって、「娘が、年頃になったので裁縫を少し習わしておかないと。」と、言って、三ヶ月か半年位は必ず出していたものである。裁縫学校も一時は大江、岡林、渡辺、古賀と四校の外にまだあったかも知れない。が、今はどうなっているのであろう。丹未亡人の裁縫学校も閉鎖されたのではないかと思う。

町には既製服が出廻り、又、ツギの当った物など誰も着ない時代に変ってしまっているので裁縫をする必要がなくなった様である。

時代によって変っているものに見合いなるものの方法もあるという人がいた。第一此の頃の若い者の大方は恋愛で仲人等の存在価値は全く薄らいでしまっているのであるが、それでも一部には紹介程度で見合いをさせる事も無い事もない。

その時の仲人の注意であるが、昔は娘もだが、娘より母親を良く見て来い、娘はその内に母親そっくりになるものだと注意したらしいが、今頃はそんな事より、見合いに行ったら、先ずトイレを借りて見てくるのだ。娘が居るのにトイレの中が清潔にされていない様なら、その娘はだめだというのである。一理ある考え方である。

又、以前は外出時に使用するのが常識であった中折れ帽子などは見る事さえ珍らしい物になってしまった。

昔でも日進月歩という言葉はあったが、今日と比べては誠にのんびりしたもので一年や二年の間にそれ程の違いはなかったし暮しも楽であったと思う。

カフェーの取れる前でも、アロースの五、六十俵にミーリヨの二百俵、それにフェジョンの三十俵も収穫すれば楽に暮せたと思う。それなのに現在では、一万俵に近い収穫をして尚、融資が払えないの、どうのと、一体どうなっているのかと思う。大豆にしろ、ミーリヨにしろ、五千俵、一万俵と収穫をあげて楽に暮していけないとなると、これは政策としても由々しき問題だから何とか改革されて行くだろうが、何とも変った時代がきたものである。

又、電話の発達もめざましい。ＤＤＤの遠距離直通が、忽ちの内にブラジル全国から、世界に迄拡がると、続いてテレックスという便利な物が入ってきた。此方で打つタイプの字が、先方に写ると驚ろいていたら、そのテレックスは何時の間にか片隅にエンコスタ（押しやられ）されたか、捨てられて、ファックスとなって字も絵もそのまま運んでくれる事になり、その機械も三、四百ドルと家庭でも据えられる様になってきた。

それにしても時々思い出すのは、我々の入植当時のカミーザ（シャツ）である。移住して一、二年は日本から持参したもので間に合わすが、後は、ファリンニヤ（メリケン粉）の空袋で作るのが流行？　したものであった。腹や背中に会社のマークが染められているのであったが、みん

なが着用しているので、おかしいと笑われる事も無かった。かえって新しい布地で仕上げた物を畠で着ていたら、ヒヤカサレたのではないかと思う。

時代とはおかしなものである。

その頃近所に入った独身青年が、他人に縫わせるのは金がかかるとて、空袋のフンド（底）に穴をあけて首を出し、フンドの両側にも穴をあけて腕を出し、前も後もそのまま。前をあければボタンを付けなければならないので、独身者にはその方が便利と言っていたが、一寸かわいそうには思ったものの、時代が時代だから笑う者はいなかった。

第二十七話

親心

一九三四年一月初旬イタペチニンガ駅で汽車から降りた、三人の日本人が、クシャクシャになった着替えの入ったサッコを肩にカッポン・ボニートに向って歩き出した。サンミゲール・アルカンジョに行くのであるが、町で、サンミゲールへの曲り角迄でも行くカミニョンでもないかと聞く言葉も解らない三人は、覚悟を決めて歩く事にして出発したのであった。

その日は天気のよい暑い日であったそうである。普通に歩いても数時間はかかる距離であるが仲間の一人が足に豆

を作って痛がるので休み休みとなり、それでも日の高い内にサンミゲール近くに着いたのであった。ちょうど西瓜畠の脇で休んでいると畠に人が働いているので金を見せて西瓜を一つ買い受けて割って見ると、中は真赤に熟して、大変に美味であった。数時間の疲れを一時に癒される思いであった。此の三人は、八月にサンミゲールから数十kmパラナピアカーバ山脈のジャングルの下に日本から移って来たばかりの北海道人の沼田小一郎（私の父）、大西信太郎、加藤一郎の三人連れであった。

コーヒー園造成の希望を抱いて移住して来たのでコーヒー園の無いセッテ・バーラス植民地には三ヶ月で見切りをつけて、コーヒーに最適地との宣伝に魅せられて北パラナ国際植民地を視察しての帰りであった。

「ロンドリーナに行きたいのです。」と、ブラジル語で書いてもらった紙を見せながら、一週間程前に、此の道を出て来て、イタペチニンガ駅より汽車に乗ってオウリーニョスで一泊、翌日ジャタイ迄行って、ジャジネーラに乗り替えてやっとロンドリーナに着いて、赤い土に驚ろきながらの視察をして、希望のカフェーの育つ土地を買い求めて、意気揚々と此処迄帰って来たところであった。

サンパウローサントスージュキヤへ廻りそこから舟でセッテ・バーラスに渡ると後は二十八km歩く事ですむのであるが、パラナ州とは反対方向の海岸へでるため日数と金がかかるので、イタペチニンガーマンパーロと百kmの道の強行突破が計画されたのであった。尚この三人のパラナ

への移動決定から陸続として此のコースが利用され、半官半民の此の植民地の崩壊寸前まで脱出者が続くのであった。

話をその三人が道端で西瓜を食べた所まで戻すと、苦しい歩行を強いられている大西氏をいたわりながら、これから挑戦する数十kmのマンチケーラ山脈のジャングルのふもとで淋しく帰りを待っている家族の事を思い出したのであった。誰かが、

「此の西瓜を下の家族に持って帰ったら、どんなに喜ぶかなあ。」と言い出した。

「そうには違いないが、此の重い、丸い西瓜をどうして六十kmも持って行けるか、歩くだけでも大変じゃないか。」

と話し合っている内に、大変だけれども一つずつ持って行こうかという事になって、十km余りの物をそれぞれサツコに入れて、着替えの着物で背骨に直接当らない工夫をして帰って来たのであった。

途中ですべって転んだりして割れたら、それは三人で食べて、割れなかったものを三軒で分けようと相談をして来たそうであるが、すべって転んでも西瓜を割らない様にと気を付けていたので転ぶのは時々転んだ、然し西瓜は割らなかったと三人共自慢にしていたが、三人共に背中の皮は西瓜の為にむけていたのであった。

ブラジルに来て、ビーラ（村落）から三十kmも山奥に入植して、くだものらしいもの、お菓子らしいものを食べさせていないからとの親心からの事であったのであるが、今の私に、子供の為に此のマネが出来るかと考えて見ると一

寸恥かしい思いがする。

西瓜の赤い処はそのまま戴いたが、白い皮の部分は翌日から、汁物の具、或は漬物として利用されたのであった。何一つ野菜の無い時であったから、西瓜の皮は仲々の珍味であった。

第二十八話　やれば出来る

私たち兄弟は一九四九年の年の瀬も押し迫った十二月に

入って、突然、ドイツ人の子無しの老夫婦から、フアゼンダを格安に譲ってもらう事になり、慌ただしく準備して、翌年三月半ばにローランジャのファゼンダに引越ししたのであった。五万本のカフェーザールに、三、四軒のコロニヤしか無く、経営はカマラーダ（労働者）でされていて、コローノや契約者はなく、人集めコロニヤ建て、ルアソンから収穫、今、振り返って見てもどうして出来たのか分らない。

カフエーなど相当粗末になったものと思うが、仕方の無い事であった。

カミニョン（トラック）の運転を知らない私が、カレアドール（作道）で、これがプリメーロ、これがセグンドと習い、危い時はブレーキを踏めという事で人集めに行く。或る時下り坂でカンビオ（ギア）が入らず、ガリガリガリと音は高鳴るが入らない、やがて、ポンテ（橋）に近づく。このままではまもなく川へてんぷくである。橋ぎわで道は九十度にカーブしているのであった。

やむなくガリガリとカンビオを押しっけていたら、ゴキンとセグンダ（セカンド）に入ってくれたので助かった。脇に乗っていたカマラーダ（労働者）が、「フオイ　ペリゴーゾ（危なかった）。」と、言ったが、本当に危い事であった。

それから間も無く同じ場所で、ミーリヨを積んだカレッタ（荷車）を引いていたトラットール（トラクター）が渡りそこねて川にテンプクしてトラットリスタがかわいそう

にも亡くなる事故が起きたので尚更、そこを通る度に思い出すのである。

無我夢中という様な状態の中でなんとか収穫も終った。相当に粗未になった事に目をつぶっていられたのも、収穫が予想を三十％以上も超過していたからであろう。更に大きな希望が湧いて来たのは、収穫した後に咲いてくれた花の量であった。六千俵は下るまいという咲き方であった。然るにテレーロ（乾燥場）として一枚の煉瓦を敷いた物が無い、倉庫が無い、コロニヤの十五、六軒はどうしても必要と思うと、収穫が終ってもゆつくりしてはいられないのであった。

コロニヤはアラポンガから来られる多田氏に請負ってもらい、倉庫はローランジャの大工さんに請負ってもらつた。

それで私達はテレーロの煉瓦敷きをしたのであるが、テレーロを終っても大工さんが来ないのである。催促に行くと、もうすぐ行くと言ってくれるのであるが、なかなか来ないので、張り切っている私たち三人兄弟は、大工さんの来る迄、土台のトツコ（丸太）でも並べて置こうと、四千俵入れの倉庫のトツコを並べた。希望に張り切っている時だからびっくりする様な太いトツコを並べたものであった。トツコが終っても大工さんはまだ来ない。来るつもりが無かったのかと云うと、そうではない。倉庫が出来上ってから断りに行くと、誰を頼んだのかと機嫌が悪かった。

然し実際一日も早く大工さんが来てくれるのを待ちながら、来られないから出来上ってしまったのであった。一寸

自慢したい程良く出来たつもりであったが、専門家が来て、立派に作ってはあるが、惜しいかな梁を張らせて無いのは残念と教えてくれた。梁と言うものは巾に対して何%か塚を短かくして釣り上げて置くと丈夫だとの事である。

とにかく素人の私らの手で相当大きな倉庫を作った事は、「何事もやれば出来る。」と、いう風に私たち兄弟の気持ちをそれとなく少し大きくしてくれた様である。

此の倉庫も四十年も経ると、解体した方が良い様な痛み方をしている。入れるカフエーの収穫は皆無となった。

時代とは移り変って行くものである事をしみじみと感じさせられている此の頃である。

第二十九話
パラナピアカーバ山脈に迷う

それは着伯直後の事であった。私達は町育ちで農業の経験がないので、カフエーザールの労働では体力が持たないだろうと思った父は海外興業株式会社のセッテ・バーラス植民地の土地を年賦払いで購入契約して移住して来たのであった。

一九三三年七月二十九日、サントス港に上陸すると直ちに、迎えの人に案内されて海岸線を南下しジュキヤ駅迄は

汽車で来て、ホテルに入ったのであるが夜中の二時か三時頃に起こされて、モトール付きの小舟でジュキヤ河を下ったのであった。リベイラ河の合流点でイグアッペから上って来る蒸気船に乗り替える為には夜中に出なければ時間の都合が悪かったのであった。

翌日セッテ・バーラスに到着すると、はや八月に入っているので、急いで伐採をしないと時期は既に遅れているという事で、ロッテの選定を急いで最奥のマンパウロ区を選び、そこの収容所へムダンサを運んだのであった。ロッテは既に最奥のロッテと決定して来ていたのに収容所に来ると、誰の誘いであったのかもっと収容所に近い土地が空いていると言う事で一日視察に出た。近いので午後に出発したのであった。

北海道から知り合って来た、大西、加藤両氏との三家族は、此処で分れ分れになるのが淋しい様な気がしたのであろうか、別々なロッテを見ても決定しかねる様な風であった。そうこうしている内に夕方五時頃であったか、道路より相当中まで平坦な土地で此のロッテは良さそうだ、一寸入って見ようかと父と兄と私の三人でマットの中へはいる事になった。すぐ出て来るからと、父と兄は上着を入らない人に預けてシヤツ一枚の身軽になって入った。下草は少なくまあまあの木があって土地は此の辺としては良さそうだ、等と話し合い乍ら五十米も入ったと思う頃、さあどこまで行っても同じだ、帰ろうと、引返したのであるが、入ったと思う程度戻っても道に出られないのであった。

入った時の何倍も歩いたが出られない。

その時父が言うには山の中で迷った時、大木に行き当ると右側へ右側へとよけて廻る人と、左側へ左側へと廻る人と、人によってクセがあるという事で、その度に少しずつ見当が狂い、結局まっすぐと思うのがグルグルとどうどう巡りをしているのかも知れんから気を付けて一直線に進もう、そうすれば道か隣りの畠に出るだろうといって歩き出したら一本の人の通っている小道に出合った。

此の時父は、

「助かった。道は家か道路につづいているものだ、さあ行こう」

と、歩き出そうとすると、兄がそちらは反対だと思うと言い出した。私も兄の考えが正しいと思ったが黙っていたら、父は、

「そうではないと思うがお前がそう思うならそちらへ行って見よう」

と兄の意見に従って進むと、しばらくして外人の畠に出た。日は既に西の山に落ち込もうとしていた。外人の小屋まで行って尋ねるといっても言葉は何もわからないが、「マンパーロ、マンパーロ。」と、言うと、手まねで後へ戻れと教えてくれたのであった。

今度は道があるので安心して急いで歩いていたら一米半程の小川に行き当った。先ず兄が飛びこえ、父が飛び、私も飛んだが、誰も落ちなかった。

うまく川は飛び越えたのであるが、さあ、大変、いくら

さがしても道が無いのである。日は没して暗くなって道が分らないので万事窮してしまった。

そこで父は、

「もうこれ以上歩いても、無駄だから寝る事を考えよう。お前マッチを持っているか」

と、兄に言うと、

「マッチは持っていない、さっき預けた上着のポケットに入れてあった。」

という。父も同じ。煙草を吸う二人共マッチも煙草も持っていない。仕方がないから枯れ葉を集めてねる事にしようと、倒れていた木の陰に枯れ葉を敷いてねる事にした。父は、火を燃やすと暖いだけでなく動物は火を怖れて寄り付かないので用心に良いのだが今夜はしかたがない。と、言いつつねる事にした。私たちは父がいっしょなので不安の内にも頼りがあったが、父には、渡伯四、五日目の事であり、北海道の寒い森林にも熊がいるのだから、南米の森林では、どんな猛獣がいるかも知れないので相当心配した事であろうと思う。

うとうととねむろうとすると父は小声でお経をとなえていた。兄も合唱していた。私たちは正真偈は暗唱していたのであった。

その内に私は少しねむったらしいが、父が「動物が来ている」と、言う。言われてみると、近い処でガサガサと少し音がするのであった。

父は緊張している様であったが、その内に音はしなく

なった。

時間は既に十二時近くなっていたと思う。

又、父が、

「誰かが呼んでいるようだ」

と言い出した。

「人の呼ぶ声がする。」

と、言って、父は大声で「オーイ」「オーイ。」と、何回か叫んだが応答は分らない。それでも父は、

「誰かが捜索に来てくれているらしいから気を付けておれ。案外早く助けられるかも知れん。」

と言ったが、何の音も聞えず三十分過ぎた頃、やっと人声がきこえて来て、応答が出来て助けられたのであった。最初の動物の音は捜索隊の犬だったらしい。

かくして無事に助けられたが、母は、渡伯早々男三人を失ってはどうするかと色々取越心配をしていたそうであった。

私達はその後森林に入る時はマッチとフォイセ（大鎌）を忘れない様にするし、十分な用心をする事になり、再び迷う事はなかった。

（編集部注・このセッチ・バーラス植民地については当文庫の「コロニア小説撰集1」に「野生」田畑三郎　の佳編がありま す）

第三十話　宮村植民地

一九五五、六年頃かと思う頃、パラナ州の森林地帯の払い下げが一般の噂に上って来た。

カフエザール植民地にいた大沼清君も一ロッテ払い下げてもらつたのか、アストルガから程近いイサーラに単身乗り込んで義務の開拓をしていると言う噂を聞いた事があった。

私も、使っていたカマラーダ（労働者）が、払い下げを受けるならイサーラ方面にはまだ良いロッテが沢山あるから、パトロンが払い下げするなら、私が入って義務の開拓は引受けてあげようと言うので、いつも色々と御指導頂いていた某氏に相談すると、「そんな事をするより、間違いの

無いロッテを買う方が安心だ」　と、注意されて、その時は諦めたのであった。

　然し、それから二、三年後に親戚の元気の良い人が、アプカラーナの元市長をしていた人に今なら見込みがあると聞いて、クリチーバまで空路出かけて申請した事があるが、それも申請しただけで流してしまった。次から次へと袖の下につっかえ棒をして行かないとならない様な事は私たちの様な気の小さい者には出来る事ではないと考えたからであった。

　昨日　（一九九五年十月二十日）　新聞に宮村季光氏の死亡広告が出ていて、あの元気な人も逝ってしまったかと一抹の淋しさを感じているのであるが、此の人も、一九五〇年代には自分の名前を付けて一大植民地を拓こうとして奔走された方であった。

　何千アルケーレスか或いは万の単位に届いていたのか、とに角相当の面積を申請して一旦レゼルバ　（仮契約）　して売り出されたのであった。

　勢いよく「共に拓かう　我らの植民地」　とか、「拓け我らの植民地」「建設！宮村植民地」等々と、宣伝も花々しく土地を売り出すと、時流に乗っていたので相当に売れたのであったが、地権は政府にあって、法律にかなった開拓をする事に依って後日下付される事になっていたのであるから、日本人なら安心して義務を履行しておれば良いと誰でも思う事で、何十kmと道路を開き、義務の面積以上の開拓をして安心していたところが、選挙の時、支持政党の負

けたのが原因か時の州知事が寝返りを打って、宮村植民地の地権を他の人に下付してしまったのであるから、さあ大変である。

早速政府相手に裁判を始めたのであるが、相手が政府であるから簡単には進まない。その上、相当な経費がかかる。事情が一般に知れるから土地購入者からの年賦支払が止まってくる。中には解約して返金を迫る者も出てくる。

裁判中に簡単に店を閉める事も出来ず、開いて置けば相当な経費もいる。

裁判も、正当な道を踏んでいるので有利な判決が下るのであるが、有利な判決が下りても、相手は政府であり、上訴して行くので、支払ってはくれないのだから、どうにもならないのである。

土地の購入者に対する「今度の裁判が終ったら」との言い訳も大変な事であったと思うのである。

あの元気な宮村氏に此の植民地のつまずきが無かったら、どんな大事業を起された事か量り知れないものがあったと思われるのであるが、無念にも此のつまずきが致命傷となって、油の乗り切っていた四十代後半から三十余年何もさせず、裁判で終った事は、彼にもどれ程か無念であった事であろう。

私はこの人の他にも二十年、三十年と長い裁判をしている人を知っているが、何故その途中で、かなりな損をしても折合いを付けないのかと思う。

「悪いのは相手だ」と言ってみても、その悪い相手で苦労している自分を考えてみると、自分にも原因があるから苦労させられているのだと考え直せるのではないかと思う。

思うというより、そうして次の仕事に取り掛った方が得策だ。

人生は何時終未がくるか解らない上、案外に短いものだと考えて事を進めるべきと思うのである。

あとがき

『新聞に包めば粗末な物に見え』と、川柳を詠んだ人がいた様ですが、何でも手にした時美しいと、うれしい物ですが、私の昔話の第一部『カフェーと移民』を印刷して見ると奥山氏の指導で、予想より大変美しく出来上りまして、うれしい気持ちになって知人に提供致しますと、装幀の美しさにつられたのでしょうが、もう一話、もう一話と読んでいると、一晩の内に読み終ってしまった。などとうれしい知らせを下さる人も居られましたので、元気を出して、ここに第二部を「ピンガと移民」と題して出版する事になりました。

世間には飲まない人の方が多いかも知れませんが、移民として家族を連れてきて、いざコーヒー園に配耕されてみると、一かく千金の夢どころか、生活費も稼ぎかねるという現実の前に、やるせない気持を、一杯のピンガにまぎらわせて切り抜けてきた人たち……。

その移民も数年すると何んとか苦境を切り抜け、独立してジャングルの開拓に立ち向った。直径一Mも有る大木も一丁のマッシャード（マサカリ）で切り倒して行く、それが町の商人上りであったり、小学校の先生上りであったり、巡査上りの人であったりするのであるから、ピンガなしではとても出来る仕事でなかったといいたい。

バタバタとマラリヤに弊れてゆく植民者を見ながら苦しんだ平野運平氏や、移民に苦情を次々と持ち込まれた大沢

大作氏なども随分とピンガの助けにあづかったらしい噂を聞く。

そうした先輩移民の時代を偲びながら、この第二部を読んで頂ければ幸いです。

表紙の『移住して安かピンガに慰安され』の私の川柳は、川柳にかなっているとは思いませんが、適当な句が見つからなかったので失礼しました。

パルミット小屋に暮していて百リットル入りの樽を据えて居れたのですから、全く安かピンガに慰められた事でした。

又、今回再び、牛窪氏、森氏、福島氏の三方には身に余るうれしい序文を頂きまして、巻頭を飾ることが出来、誠に有難うございました。

牛窪氏には更にたのしいマンガ、挿画を添えて下さいまして、重ねて厚くお礼申し上げます。

著者　沼田信一　略歴

出　生　大正八年（1918）四月十五日
北海道札幌市北二条東一丁目に生る
学　歴　札幌市第一高等小学校卒
渡　伯　昭和八年（1933）七月サントス上陸、アリゾナ丸
直接海外興業株式会社開発のセッテ・バーラス植民地マンパウロ区へ入植、翌年五月パラナ州ロンドリーナ市郊外へ移転、1942年フレーザ区へ移転、1950年ローランジャ市郊外へ移転、1953年ロンドリーナ市内に移り今日に至る。
職　業　渡伯後一貫して農業

ピンガと移民

発　行　1996年9月
著　者　沼田信一
SHINICHI NUMATA
Rua Raposo Tavares, 828
Londrina - Paraná - Brasil
CEP 86010-490 Tel.:(043)322-1740
印　刷　Editora Gráfica Topan-Press Ltda.
Rua Muniz de Souza, 655 - São Paulo